

「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」

青山学院女子短期大学では、70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」を2019年度から2020年度にかけて、4回開催いたします。第3回は以下の内容の展示により、青山学院の礎を築いた女性宣教師たちの想いを、本学がどう継承してきたかを探ります。

I. アメリカ・フェミニズムとミッション

II. 青山学院の女子教育とジェンダー

III. 青短のリベラルアーツとジェンダー

IV. 等身大の青短生たち *Dora E. Schoonmaker*

—卒業生調査から見えてくるもの



会期：3月24日(火) 10:00~17:00

4月1日(水)~5月9日(土)

9:00~18:20(月~金) / 9:00~15:00(土)

日曜日、5月4~6日は閉廊

会場：短大ギャラリー（短大北校舎1階礼拝堂隣り）

ジェンダー研究所開設記念

主催：青山学院女子短期大学

企画主体：総合文化研究所 研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」

運営主体：ジェンダー研究所運営委員会（総合文化研究所）

協力：青山学院資料センター・短大同窓会・広報企画委員会



短大ジェンダー研究所開設記念
vol.3 「ミッション×女子教育×ジェンダー」
会期：2020.3.24 / 4.1-8.7
会場：短大ギャラリー

青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展
「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」
vol.3 「ミッション×女子教育×ジェンダー」

ごあいさつ

青山学院女子短期大学 総合文化研究所
研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」
プロジェクトリーダー 梅垣千尋

新型コロナウイルスの影響で先の見えない日々が続くなか、青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」にお越し下さいまして、まことにありがとうございます。第1回「青短の源流を訪ねて」、第2回「青短の誕生と発展」に引き続き、今回は「ミッション×女子教育×ジェンダー」というテーマで第3回の企画展示を行うことになりました。

今回の企画では、第Ⅰ部「アメリカ・フェミニズムとミッション」、第Ⅱ部「青山学院の女子教育とジェンダー」、第Ⅲ部「青短のリベラルアーツとジェンダー」、第Ⅳ部「等身大の青短生たち」という四部構成で、女子小学校から現在にいたるまでの青山学院における女子教育の歴史を、ジェンダーの視点からとらえ直すことを目的としています。

宣教師の活動による国境を越えた女性同士の絆、青山学院の源流を支えた女性たちの活躍、青短のジェンダー教育の展開などからは、未来の女性たちがより大きな人生の可能性をつかみとることができるよう、各世代の女性たちがバトンを受け渡していった様子が浮かび上がります。青山学院という場に集ったさまざまな女性たちによる、時代を超えた「シスターフッド」といえるかもしれません。

この連続ギャラリー展は、総合文化研究所の 2019～20 年度研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」グループが企画し、ジェンダー研究所準備委員会が運営主体となって進めました。本学のジェンダー研究所は 2020 年 4 月、総合文化研究所内に設立され、さらに 2021 年度には、「スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」として青山学院大学に移管される予定です。青短が体現してきた女子教育の伝統は、新しい時代の男女共生社会を切り拓くため、今後も青山学院大学の中かで生き続けます。

最後になりましたが、このたび、第1回から毎回ご協力いただいている青山学院資料センターの貴重な資料をはじめ、青山学院大学図書館の貴重書、短大図書館の蔵書を展示できますことに深く感謝申し上げます。

I アメリカ・フェミニズムとミッション

スクーンメーカーを送り出した米国フェミニズムとミッション

後藤 千織（現代教養学科国際専攻 准教授）

19世紀初頭のアメリカ合衆国では、交通網の発達・全国市場の形成・工業化によって、生産と消費の多くが市場を介して行われるようになり、ジェンダー化した生活領域が発達した。自給自足や物々交換のために各家庭で行っていた生産活動が減り、家庭外で賃金労働に従事する男性が増え、家庭は女性が家事・育児に専念する空間として再定義された。男性が利潤追求と競争に明け暮れる公的領域に対して、世間の喧騒から隔離した家庭は、自己犠牲を厭わない女性が、夫や子どもに道徳心と安らぎを授ける空間として礼賛されるようになった。女性たちは家庭、教会、寄宿学校に集い、親族関係を基盤として同性間の親密な関係性を築いた。

ジェンダー化された生活領域の形成に伴い、キリスト教に結びついた理想の女性像が新たに登場した。植民地期以来、アメリカの女性とキリスト教の関係は深く、18世紀末～19世紀初頭の第二次大覚醒（信仰復興運動）では、回心者の7割が女性だった地域もある。経済活動で多忙な男性が教会から遠ざかる中、教会指導者層は熱心な女性教会員を肯定的に評価し始めた。女性は「情欲がない」から、男性よりも動物的ではなく、神に近いというイメージが登場したのである。19世紀アメリカの「真の女性」は、敬虔・純潔・従順・家庭的という特性を備え、その道徳性をもって夫や子どもを有徳の市民にするとされた。女性たちは婦人会や日曜学校を運営して教会を支え、1812年にアメリカの海外伝道が始まると、祈り献金を捧げる会を地域で組織した。また、宣教師の妻として海外伝道に携わった女性の生涯は追悼録に記録され、敬虔さと自己犠牲を体現する理想の女性として崇められた。



第二次大覚醒のキャンプ・ミーティング
(c1829、米国議会図書館所蔵)



元奴隷のソージョナー・トゥールースは、神のおかげで巡回説教者となり、奴隷制廃止と女性の権利を訴えた（米国議会図書館所蔵）。

家庭での自給的な生産活動が減ると、中流女性が中等教育を受ける機会が増え、教職の女性化が進んだ。共和国には「公德心」を備えた市民が不可欠であり、女性は家庭で有徳の市民を育てて社会に奉仕するという「共和国の母」論は、革命後も政治から排除された女性を懐柔するイデオロギーであったが、アメリカの女子教育の発達を促した。1830年代に白人男性の普通選挙が実現すると、「共和国の母」の教育も重要性を増し、1830年代から1860年代にかけて女子中等教育機関のセミナーが各地で設立された。アメリカの女子教育は、ヨーロッパの「装飾的」女子教育とは異なる、共和主義を支える良き妻・母になるための実質的教育を目指した。さらに、1830年代に公教育推進運動が始まると、キャサリン・ビーチャーら女子教育推進者は、女

性は母性ゆえに年少者教育に適するという論理で、女性教員の採用を訴えた。女性教員の採用が進んだ最大の理由は、彼女たちの賃金の安さであったが、教師としての能力も高く評価され、多くの女性が結婚前に小学校の教師として働いた。

19世紀アメリカの女性たちは、「真の女性らしさ」がもたらす道徳的権威をもとに、家庭での影響力を公的領域に広げた。はじめは慈善活動や宗教活動に関わる女性団体を組織していたが、1830年代になるとラディカルに社会変革を求める運動が増え、批判の矛先が不道徳な男性や教会の保守性に向かうことも



女性の権利運動を率いたエリザベス・ケイディ・スタントンとスーザン・B・アンソニー（米国議会図書館所蔵）

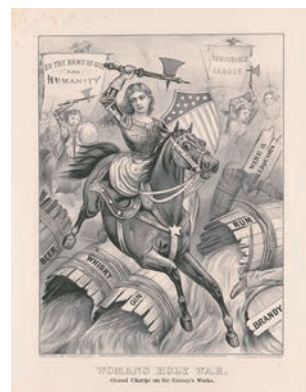


工業化が進み、家庭外で働く女性も増えた。1860年、リン市の製靴労働者ストライキを先導する女性たち（米国議会図書館所蔵）

あった。道徳改良運動は男性の性的放縦を非難し、禁酒運動は「アルコール王」の家族扶養放棄と妻の虐待（性的暴力を含む）を批判した。奴隷制に反対する黒人女性の活動は白人女性にも波及し、女性たちは請願活動・資金集め・逃亡奴隷の支援などで運動を地道に支えた。後に女性の権利運動を主導する女性の多くが、奴隷制廃止運動や禁酒運動に参加した経歴を持つ。

南北戦争後、男女の平等を根拠とする女性参政権運動は困難に直面したが、女性の独自性を強調した社会活動は興隆し、地域を越えたネットワークを確立した。19世紀最大の女性団体である婦人キリスト教禁酒同盟は、「何でもやる」をスローガンに、禁酒運動に加えて性道徳の改革・刑務所改革・幼稚園の設立など多種多様な活動を行い、女性参政権運動も支持した。教会では、1860年代末から女性が教派単位で婦人伝道局を設立し、独身女性宣教師を国外に派遣し始めた。また、各地で「婦人クラブ」が結成されるなど、キリスト教と直接的な結びつきのない女性活動も増えた。

19世紀アメリカの女性たちは、敬虔さに裏付けられた道徳的権威をもとに、ときに教会の伝統やジェンダー規範と衝突しながら社会改革に取り組み、家庭から国外まで活動領域を広げた。女性宣教師の伝記に感銘を受け、教師として働き、海外伝道に踏み出したドーラ・E・スクーンメーカーは、19世紀アメリカの女性とキリスト教の密接な関係性を体現していると言える。



19世紀後半の禁酒運動の戦闘性を捉えた戯画（c1874、米国議会図書館所蔵）

I アメリカ・フェミニズムとミッション

ドーラ・E・スクーンメーカー (1851-1934) とアメリカのシスターフッド

棚村 恵子 (元東京女子大学教授・元青山学院女子短期大学講師)

19世紀後半に大々的に展開されたアメリカの女性海外伝道活動は、いみじくもメソジスト監督派教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church 以下略して WFMS-MEC、1869年結成) の機関誌のタイトルである『異教徒の女性たちの友 (Heathen Woman's Friend)』に表現されているように、アジアを主とした非キリスト教国の女性たちの「友」として彼女たちを伝道と教育によって救わねばならないというアメリカ人女性特有の責任感と使命感からなされた。青山学院の女子教育の歴史を拓いたドーラ・E・スクーンメーカー宣教師も、そのような理念の下にあった WFMS-MEC から 1874 (明治7) 年秋に日本に派遣された。



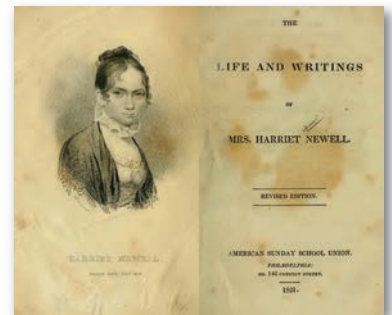
ドーラ・E・スクーンメーカー
(Dora E. Schoonmaker)

スクーンメーカーがそもそも海外宣教師を志した動機は、8歳のときに読んだ宣教師の伝記だった (『ハリエット・ニュー

エルの生涯と著作)。アメリカ日曜学校連盟から出版されたその本は伝道の使命を帯びて異国に赴きながら19歳で病死した女性の物語で、少女たちに強烈な印象と深い感動を与えた。女性の職業が限られていた時代にキリストの召しに応じて広い世界に出て行く宣教師の道は、

信仰熱心な乙女たちにとって魅力的な人生の選択肢であった。

当時、女性たちが牧師になる道は開かれていなかったもので、女性宣教師たちの仕事は主に教育の現場を通して現地の少女たちに伝道し、自らの似姿、ウーマンフッドに育て上げそれを通して日本の社会に変革をもたらすことだった。そのためには信仰や召命感とともに教師の経験が必須条件であったので、スクーンメーカーは高等学校を卒業後、地元の学校の教員となった。さらに、WFMS-MECのノースウエスタン支部の熱心な役員であり教育家でもあったジェニー・ウィリング女史の秘書となり、彼女から指導と助言を受けるとともに伝道協会が日本に初めての宣教師を派遣する計画をいち早くキャッチした。宣教師の訓練や教育を施すフィーメールセミナリーのような学校に行く経済的余裕がなかったスクーンメーカーの場合、幼いころからの夢を具体的な仕事に結びつける女性同士の人脉こそが日本への道を開いたと言えよう。



19歳で亡くなった女性宣教師の伝記『ハリエット・ニューエルの生涯と著作』(アメリカ日曜学校連盟、1831年)



WFMS-MECの役員
『しなやかに夢を生きる』
棚村恵子著より



ジェニー・ウィリング (Jenny Willing)

スクーンメーカーのような女性宣教師を派遣したのは、女性たちだけのリーダーシップによる各教派の伝道局であった。男性の監督や指示なしに、女性たちは自由に方針を決定し、宣教師の渡航費、給与、学校設立の資金を集めた。スクーンメーカーの来日の背後には、彼女と志を共有する WFMS-MEC ノースウエスタン支部の女性たちの熱い声援と具体的支援があった。まさに「女性のための女性の仕事」(アメリカ長老派女性伝道局の機関紙のタイトル)として海を越えたシスターフッドの顕れとして海外伝道が展開された。

全国津々浦々に配布される機関誌には、スクーンメーカーの動静が逐一報告され、支援者たちは自分たちが遠い異国の女性の友をどのように助けているか知ることができた。そのような支援者たちに向けて、スクーンメーカーは早く結果を出さねばならないというプレッシャーに晒された。異文化の中での生徒集めや校舎建設の苦労に加えて、プロテスタント各派の女性海外伝道

局の女性宣教師たちとの競争のプレッシャーに苦しんだスクーンメーカーにとって日本人の女性たちを「友」とすることはアメリカの支援者たちの期待ほど簡単なことではなかったが、1877(明治10)年に海岸女学校開校に成功し、1879(明治12)年11月に帰国した。これからという時に校長としてのキャリアを捨て、学校の発展を後任に委ねて帰国の道を選んだのは、母子家庭で培われた母娘の絆の故であった。

確かに現代の観点に立つと「暗い地に光を届ける」という使命感に溢れた WFMS-MEC の仕事は、アメリカ女性たちのアジアへの勝手な思い込みに基づく「異教徒」の女性たちへの友情と信仰の押し付けだと批判されるかもしれない。しかし、その偉大なおせっかいなしには青山学院の優れた女子教育の伝統も歴史もなかったと言えるのではないだろうか。



Heathen Woman's Friend
創刊号の第1ページ
『しなやかに夢を生きる』より



306 WOMAN'S MISSIONARY FRIEND November

give great impetus to the work, which was and prospered accordingly through the year.

In the fall of 1879 it became necessary for me to return to my native land, and I left my dear friends and the dear children of Miss Whiting, Miss Peterson and Miss Hildbrand, who were so dear to me as my own in every way. This I did not do until the month of December of 1879 when word came that one of the dear ones here on our mission in Japan in those days had wiped out the loan school building and left the three remaining almost finished.

Thus the Woman's Foreign Missionary Society after its long and successful career in the dear mission work of traveling about the east coast had left behind them funds for the rebuilding of their work in Japan.

Nothing daunted, the same three women felt in charge of the work next morning with the rebuilding of the school, and busily through their efforts, as well

as those of the women who then remained here, the Woman's Foreign Missionary Society had been able to rebuild the school in Tokyo of more than a thousand pupils, with hundreds of generous contributions sent from that school as teachers, Bible women, and converts of Christian homes, wonderful Christ, who can work "invisible" the chosen happy instruments to bring about such results!

Her who was, I am eighty-five-year-old, remember of those early days, writing this message to the Woman's Missionary Friend? However, for some reason, my remembrance had been kept on by the glorious courage of our society, but by the splendid work of the Father's Society on the ground. The church now sent me to the dear old home, wonderful Christ, who can work "invisible" the chosen happy instruments to bring about such results!

Her who was, I am eighty-five-year-old, remember of those early days, writing this message to the Woman's Missionary Friend? However, for some reason, my remembrance had been kept on by the glorious courage of our society, but by the splendid work of the Father's Society on the ground. The church now sent me to the dear old home, wonderful Christ, who can work "invisible" the chosen happy instruments to bring about such results!

Her who was, I am eighty-five-year-old, remember of those early days, writing this message to the Woman's Missionary Friend? However, for some reason, my remembrance had been kept on by the glorious courage of our society, but by the splendid work of the Father's Society on the ground. The church now sent me to the dear old home, wonderful Christ, who can work "invisible" the chosen happy instruments to bring about such results!



最初の海岸女学校校舎・牧師館 築地明石町10番

「往時を振り返って」、スクーンメーカーによる、日本時代を振り返っての最後のメッセージ
Woman's Missionary Friend Vol.67-10 (1934年11月号)
『しなやかに夢を生きる』より

I アメリカ・フェミニズムとミッション

女性宣教師の日本通信 ―アメリカの女性たちは何を学んだか―

齋藤 元子（総合文化研究所研究プロジェクト 客員研究員）

女性宣教師をアジア、アフリカの異教地に派遣する目的を掲げて設立されたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、発足後直ちに機関誌の発行に着手する。アメリカのホームベースと異教地のフィールドをつなぐ密度の高いコミュニケーションのツールとして、機関誌の存在こそが協会の永続性と成功の鍵を握るとの確信に基づく行動であった。そして、*Heathen Woman's Friend* と命名された機関誌が誕生する（後に *Woman's Missionary Friend* と改名）。

Heathen Woman's Friend の誌面の大部分を占めていたのは、日本、インド、中国などの異教地に派遣された女性宣教師からの報告書簡である。その内容は、彼女たちが取り組んでいる女子教育や医療活動の詳細な報告にとどまらず、伝道地の地理、歴史、文化、生活習慣などを紹介するエッセイにまで及んでいる。女性海外伝道協会では、アメリカ各地の支部ごとに、機関誌に掲載された女性宣教師の報告書簡をテキストに用いて、勉強会を催した。つまり、機関誌を媒介として、伝道地の情報がアメリカにもたらされ、アメリカの女性たちはそこから海外についての知識を得、女性海外伝道運動への参加意識を高めることができたのである。協会本部は、かなりの予算を投じて勉強会で使用する「宣教師活動地の地図」と題した地図帳や壁地図を作成した。19世紀、北米に住む女性の大半は、自分たちの大陸以外の世界について、その多くを女性宣教師の報告から学んでいたといわれている。



アメリカの勉強会で使用された日本地図
廃藩置県により設置された県名ではなく、
旧国名が記載されている

Woman's Missionary Friend Vol.29-11
(1898年5月号) p.338 より



メアリー・ホルブルック Mary Holbrook

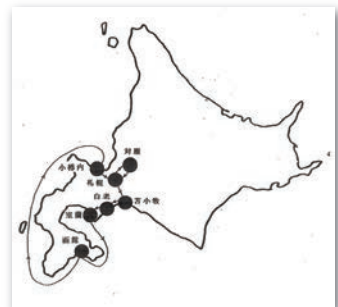


築地居留地地図より（1984年）
海岸女学校のあった明石町10番、13番

Heathen Woman's Friend に掲載された日本からの報告で、その数が際立っているのは、メアリー・ホルブルック (Mary Holbrook) の書簡である。ホルブルックは、1878 (明治11) 年に来日し、第三代海岸女学校校長を務めた。海岸女学校の生徒たちに対するホルブルックの第一印象は、「おしなべて虚弱体質で、自己の健康管理意識と屋外運動の習慣を身につけさせる必要がある」というものであった。1876 (明治9) 年築地居留地十番に誕生した海岸女学校は、1879 (明治12) 年12月の火災ですべてを失ったが、1881 (明治14) 年に居留地十三番に新校舎を再建した際、旧校舎跡の十番を運動場として使用すると決断したのは、ホルブルックの意志の実現といえる。

ホルブルックの書簡には、活動地である東京築地の様子のみならず、休暇や出張で訪れた日光、富士山、浅間山、大阪、奈良、京都、名古屋などの紹介もあるが、圧巻なのは、北海道アイヌ集落の探訪記である。*Heathen Woman's Friend* に3回にわたり分載され、「語学力と文章力は抜き出ており、作文が殊更上手であった」とホルブ

ルックを評した恩師の言葉を裏付ける読み応えのあるエッセイである。アメリカの女性たちの興味を喚起したであろう逸話が次々に登場するが、「アイヌは日本の先住民とみなされており、日本人との関係は、アメリカ・インディアンと米国人との関係に非常に似ている」、「アイヌの子どもたちは樹皮の繊維で作られた一枚の衣服を着ており、それらにはアイヌ独特の装飾が施されていて実に可愛い」、「上唇の入れ墨は、アイヌ女性の慣習である。入れ墨は口髭の形に施されているので、男性のように見える。幼い少女は唇にただ縁彫りを付けているだけであるが、結婚すると完全に墨を入れる」はその好例といえよう。これらの記述を通して、アメリカの女性たちは、日本が多様な文化を持ち合わせた国であることを知ったに違いない。



メアリー・ホルブルックの旅のルート



海岸女学校で使用された地理教科書掲載の世界地図

ホルブルックをはじめとする女性宣教師の書簡から日本についての様々なことを学びつつあったアメリカの女性たちは、自らが支援する日本の女学校の生徒たちにも、海外に目を向けてほしいと願った。火災の後、1881(明治14)年9月に新校舎が誕生すると、アメリカから数枚の大判世界地図と地球儀が間もなく贈呈されたというエピソードはその願いの表れであろう。

女性宣教師たちは、アメリカの女性たちの思いに応えるがごとく、生徒たちに英語の手紙が書けるよう熱心に指導した。そして、生徒の手紙は、女性宣教師の報告書簡と同様に、機関誌に掲載された。その一例を紹介しよう。「日本の議会」とタイトルが付された一生徒の手紙は、1890(明治23)年7月1日に実施された第一回衆議院議員選挙の結果について書いている。「300議席のうち、当選したクリスチャン議員はわずか14名である。しかし、日本の全人口が約4千万人、その中でクリスチャンはわずか3万人、この比率を考えれば、14名は決して少ない数ではない。さらに、初代議長に選ばれたのがクリスチャンのミスター・カナジマ(中島信行)であるのは、何と喜ばしいことであろうか」との記述がある。この手紙がアメリカの勉強会で読まれたことは、想像に難くない。



「日本の議会 (The Japanese Parliament)」と題した一生徒の手紙
Heathen Woman's Friend Vol.22-10
(1891年4月号) p.229より

I アメリカ・フェミニズムとミッション

女性宣教師と女学校卒業生のシスターフッド ―文書活動における共同作業―

齋藤 元子 (総合文化研究所研究プロジェクト 客員研究員)



マティルダ・スペンサー Matilda Spencer



ヴァン・ペテンと海岸女学校初期の生徒
Heathen Woman's Friend Vol.15-9 (1884年3月号) P.201 より
前列右が元良米 (その後は永井英子)



『スズナ・ウェスレー女の傳』

女子教育と同時に、日本において女性宣教師が熱心に取り組んだ活動として、文書活動を見逃すことはできない。日本人女性を読者対象とした伝道書や雑誌の発行である。

1888 (明治 21) 年女性宣教師マティルダ・スペンサー (Matilda Spencer) は、メソジスト教会の祖ジョン・ウェスレーの母であるスザンナ・ウェスレーの伝記を著した。スペンサーは海岸女学校の教師であり、同校で学んだ元良米が翻訳し、『スズナ・ウェスレー女の傳』と題して教文館の前身である美以雑書会社より刊行された。

翻訳を担当した元良米は、1881 (明治14) 年築地居留地十三番に完成した海岸女学校新校舎の講堂で、杉田勇次郎と結婚式を挙げた。同窓の岩村千代と小崎弘道カップルとの合同の式であった。杉田勇次郎は、元良家の養子となり、元良勇次郎としてアメリカ留学を経た後、日本に心理学を紹介した人物である。小崎 (岩村) 千代は日本キリスト教婦人矯風会会頭、小崎弘道は牧師、同志社社長として活躍した。

スペンサーと元良米は、海岸女学校において教師と生徒の関係であったが、やがて伝道書発行という活動に力を合わせる同志の関係へと発展していったのである。『スズナ・ウェスレー女の傳』は、1892 (明治25) 年と1894 (明治27) 年に再版が刊行されており、多くの人に読まれたことがうかがい知れる。いずれの版も青山学院資料センターに所蔵されている。

女子教育を推進するために多数の女性宣教師を送り出したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、明治も半ばを過ぎる頃、文書活動に専従する女性宣教師を日本に派遣する。ジョージアナ・ボーカス (Georgiana Baucus) とエマ・ディキンソン (Emma Dickinson) である。ボーカスは初来日ではなく、海岸女学校の姉妹校である遺愛女学校、弘前女学校、米沢女学校で教師や校長の経験があった。ボーカスとディキンソンは横浜の山手に常磐社という出版社を興し、月刊誌『常磐』や数多くの女性向け

邦文書籍を刊行した。常磐社では複数の日本人女性が二人の活動を支えた。

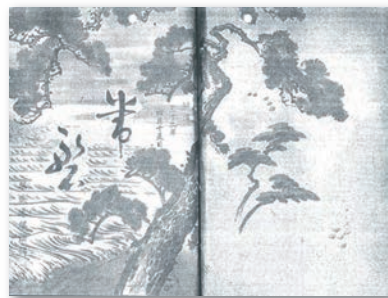
ポーカスとディキンソンが日本人スタッフに求めたのは、英語の理解力に加えて、料理・育児・衛生などについての素養である。この要件を満たしていたのが、青山女学院をはじめとする女性宣教師により設立された女学校の卒業生であった。英語が得意という日本人男性に翻訳を任せられた際の失敗談を、ポーカスはユーモアを交えて次のように語っている。「彼は優れた翻訳者と思われたが、彼の語彙力は料理本で使われるような用語には及んでいなかった。彼が訳した料理法に従って調理したものを食べたならば、全員病院に運ばれるに違いない」と。

ポーカスとディキンソンは、女学校の卒業生が身につけていた知識に着目し、それを社会的に活用する一つの試みとして、常磐社を創設したとも考えられる。併せて、女学校の卒業生に原稿を依頼し、書くことを通じて社会に発言する機会をも提供していた。

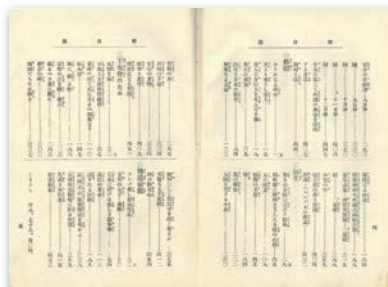
月刊誌『常磐』には、青山女学院の生徒募集広告やYWCAのルーツとされる王女会(King's Daughters)と名付けられた奉仕活動グループがプロテスタント系女学校の間に広まり、青山女学院を会場に集会や講習会がしばしば開催されていたとの記事もみられる。



ジョージアナ・ポーカス Georgiana Baucus (左)
エマ・ディキンソン Emma Dickinson (右)



月刊誌『常磐』表紙



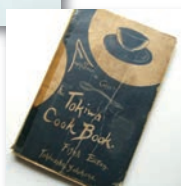
月刊誌『常磐』目録



月刊誌『常磐』に掲載された青山女学院の生徒募集広告 1908(明治41)年2月号より

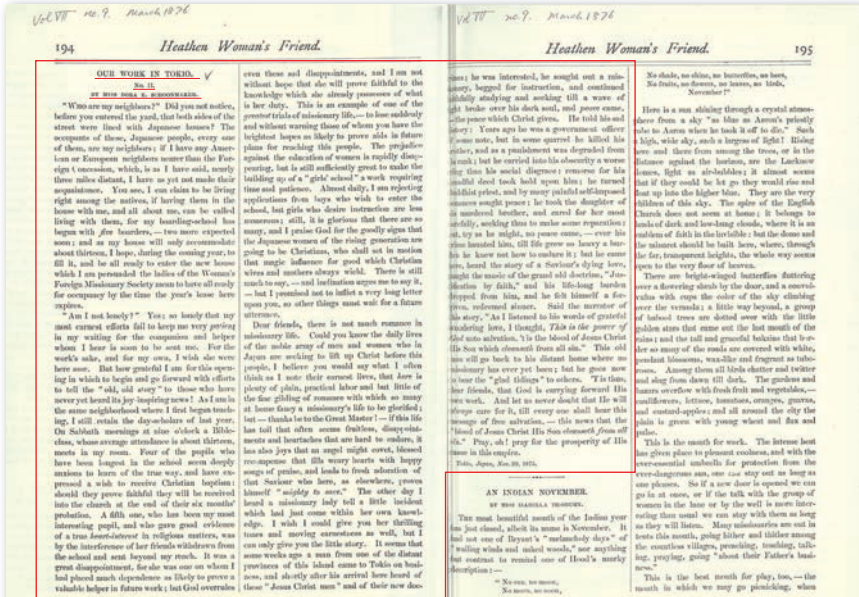


常磐社の出版物
『常磐西洋料理』の表紙・裏表紙

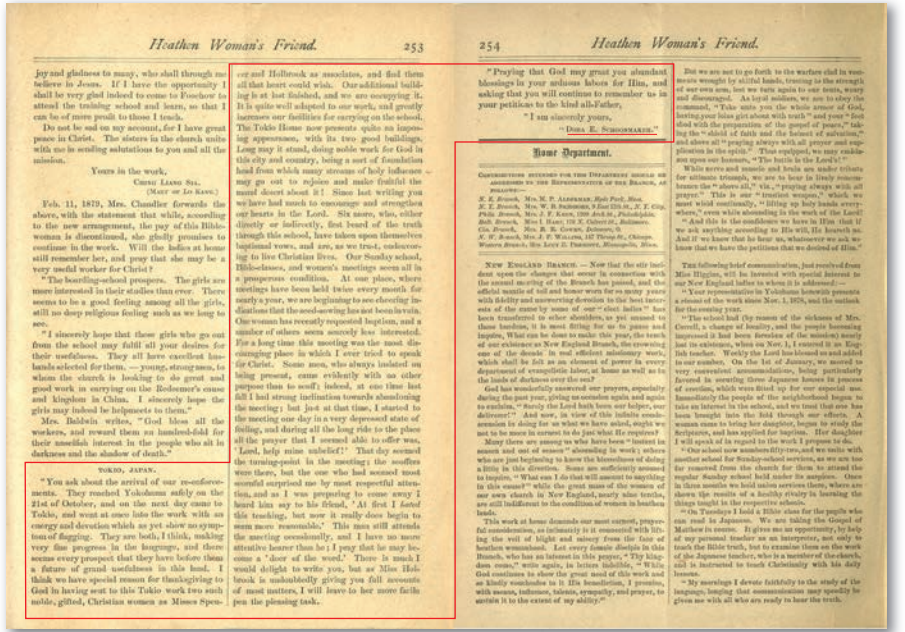


Heathen Woman's Friend ドーラ・E・スクーンメーカーの執筆記事

齋藤 元子



"OUR WRK IN TOKIO No. 11" Heathen Woman's Friend Vol. 7-9 (1876年3月号) P.194-195



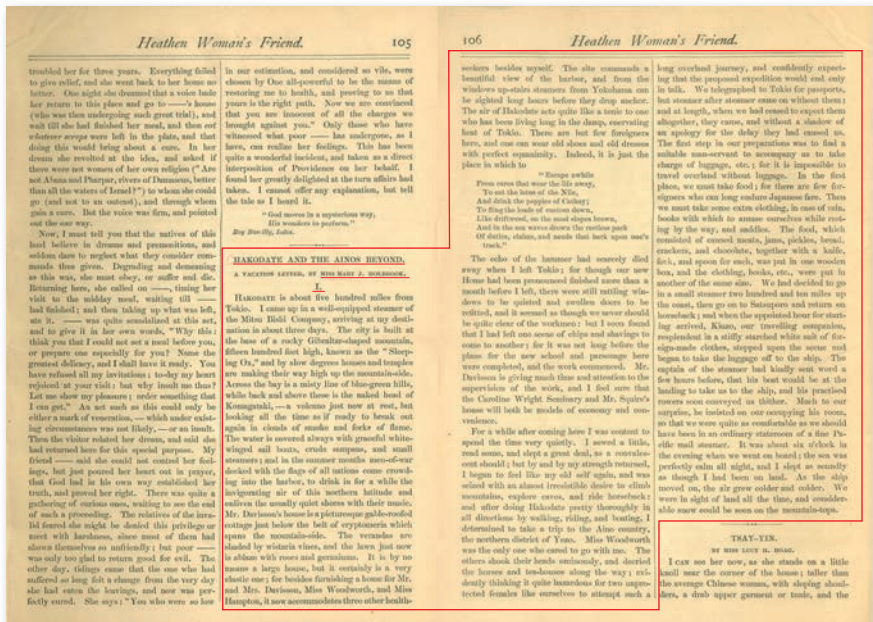
"TOKIO JAPAN" Heathen Woman's Friend Vol. 10-11 (1879年5月号) P.253-254

※展覧会では他に以下の記事もパネルに入れた
"FROM WPK" Heathen Woman's Friend Vol. 7-2 (1875年8月号) P.38
"OUR WRK IN TOKIO No. 1" Heathen Woman's Friend Vol. 7-8 (1876年2月号) P.174-175

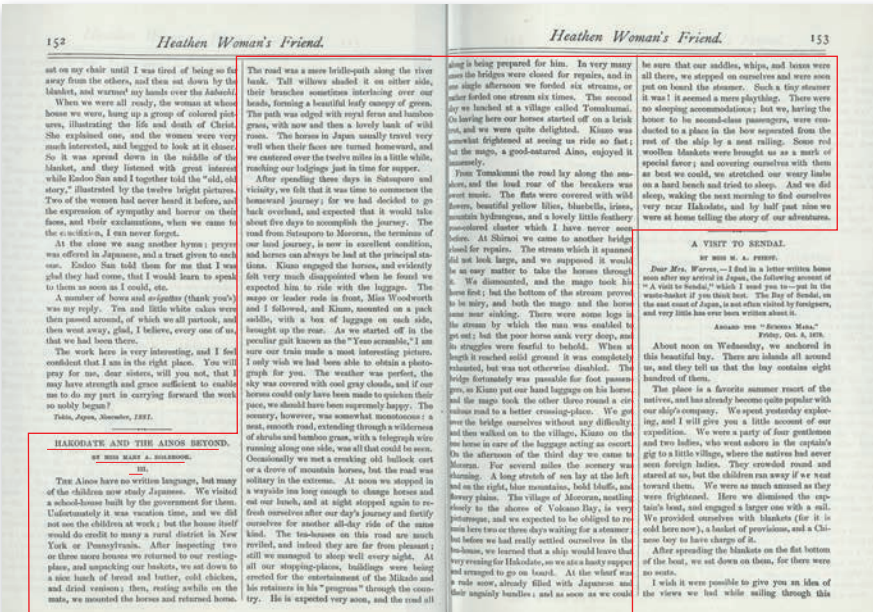
Heathen Woman's Friend メアリー・ホルブルックの旅行記

齋藤 元子

Heathen Woman's Friend に掲載された「函館とその先にあるアイヌ集落 (Hakodate and the Ainos beyond)」と題するホルブルックの旅行記



"HAKODATE AND THE AINOS BEYOND I" Heathen Woman's Friend Vol. 13-5 (1881年11月号) P.105-106



"HAKODATE AND THE AINOS BEYOND II" Heathen Woman's Friend Vol. 13-7 (1882年1月号) P.152-153

※展覧会では他に以下の記事もパネルに入れた
"HAKODATE AND THE AINOS BEYOND II" Heathen Woman's Friend Vol. 13-6 (1881年12月号) P.127-129

女性宣教師によるアジアにおける女子教育の展開

小林 瑞乃 (現代教養学科日本専攻 准教授)

女性宣教師の働きによって各地に女子教育を行う学校が設立され
日本女性に対する近代的教育が進展したのであった。

TABULATED REPORT OF W. F. M. S. SCHOOLS IN JAPAN.

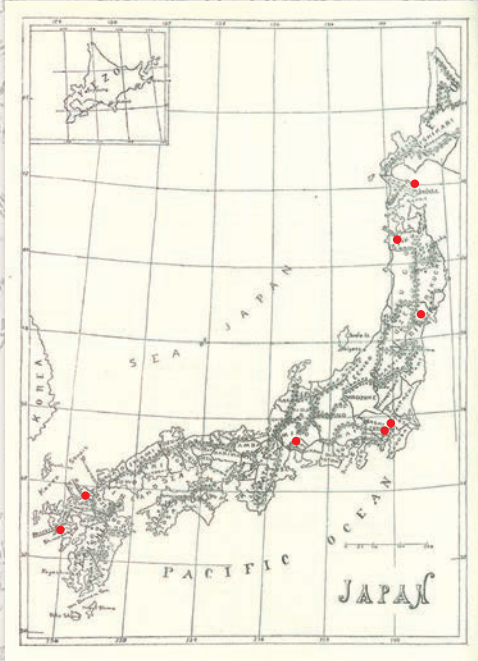
Station	Schools	Classification	Founded	First Principal or Superintendent	Present Principal or Superintendent	Schools under the same charge	Teachers	Students	Value of property owned	Value of other property owned	Industries Taught	Orphanism
● Hakodate	1	*Boarding	1892	Miss Hampton	Miss Dickerson	50	180	12	1829.00	15	Sewing, Cooking	58
● Hiroaki	2	*Day	1886-1895	Miss Hampton	Miss Hewitt	215	70	106.65	10	Sewing	17	
● Sendai	1	Day (Industrial)	1893	Miss Phelps	Miss Imhoff	8	44	3	29.87	9	Japanese Sewing, Embroidery, Drawn-work, Knitting, Crocheting	58
● Tokyo	1	*Boarding	1874	Miss Schomaker	Miss Watson	63	108	13	1224.00	14	Sewing, Etiquette, Flower Arrangement, Cha-no-ya	58
Tokyo	1	Boarding (Industrial)	1880	Miss Blacklock	Miss Blacklock	17	62	12	1276.43	5	Japanese Sewing, Embroidery, Drawn-work, Knitting, Crocheting, Wood-carving, Cooking	21
Tokyo	6	Day	1882-1887	Miss Halbrook	Miss C. H. Spencer	1025	18	1410.00	8	Sewing	78	
● Yokohama	1	Boarding (Training)	1884	Mrs. Van Petten	Mrs. Van Petten	25	33	0	383.47	4	Japanese Sewing	28
Yokohama	3	Day	1878-1895	Miss Higgins	Miss Lewis	261	11	1210.51	8	Japanese Sewing, Drawn-work	132	
● Nagoya	1	Boarding	1888	Miss Danforth	Miss Bender	40	7	667.00	7	Sewing, Embroidery	17	
● Nagasaki	1	Boarding	1879	Miss Russell	Miss Young	60	217	21	1700.00	14	Foreign and Japanese Sewing, Embroidery, Drawn-work, Flower-making, Wood-carving, Cooking, Sweeping	47
● Fukuoka	1	Boarding	1885	Miss Gher	Miss Seeds	10	61	9	362.00	8	Sewing, Embroidery, Cooking	14
Kaga	1	Orphanage	1893	Miss Russell	Miss Young	25	2				Sewing, Weaving, Gardening, Silk-culture, and Domestic Work of all kinds	

Total : 21 Schools, 2427 Pupils, 370 Christian Graduates.

* With Education Department.
 † With Training Department for Bible Women.
 ‡ One of them property of a Nippon School.

‡ One of these a Kindergarten. Another has Industrial Department.
 † Many more have been baptised since graduation.

W.F.M.S.によって日本で開設された学校一覧 (1900年7月)



日本地図 (1898年5月)



長崎の学校 (1882年8月)



函館の学校 (1884年11月)

女性宣教師によるミッション 女子教育は世界に拡がり
アジアにおいてもそれぞれの国の女性達の覚醒に重要な役割を担った。
活水女学校などではインターナショナルクラスも開設されていた。



福岡の学校 (1891年8月)



南京学校の少女たち (1891年2月)



梨花學堂 (1893年4月)



北京女子訓練学校 (1891年10月)



活水女学校(長崎)のインターナショナルクラス (1908年8月)



北京寄宿学校 (1892年1月)

II 青山学院の女子教育とジェンダー

本多貞子 —女性同士の絆と連帯、信仰に生きた生涯—

小林 瑞乃（現代教養学科日本専攻 准教授）

青森県議会議長、日本メソジスト教会初代監督、青山学院第二代院長などを歴任した本多庸一の妻貞子の生涯はほとんど知られていない。だが、先妻との子ども2人を抱えた本多の後妻として6人の子どもを産み、8人の子の母として奮闘しつつ、女性蔑視の日本社会を変えるべく結成された「婦人矯風会」の中心的存在として様々に活躍していたのである。貞子の伝記をまとめた井上ゆり子は、明治という女性への偏見に満ちた時代に「ひそやかに自分を貫いている」と評している（『力を与えませ 本多庸一夫人貞子の生涯』青山学院、2004年）。その人生を辿っていきたい。



本多庸一・貞子結婚写真 1888年

長峰サダは1862（文久2）年、南部盛岡藩下級武士長峰忠司と妻タミの次女として生まれた。1876（明治9）年、岩手県唯一の女子学校として創立された志家学校に14歳で採用され、翌年には首座教員となるほど非常に優秀で、さらに県から嘱望されて1878（明治11）年、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）に入学する。

わずか開校3年のこの官立女子教育機関は超エリート校で、かつ自由な雰囲気にあふれ、唱歌教育の指導者育成のためお雇い外国人からピアノやオルガン、バイオリンなど西洋音楽等も学んだ。皇后行啓の折には御前講演をする代表者の一人に選ばれ、サダは「読法」の発表を行った。最先端の教育を受けて吸収し、完璧に体现できる才媛であった。

卒業後の1881（明治14）年、ミッションスクール桜井女学校に赴任し、代理校主（校長代理）矢島楯子やマリア・ツルーらと出会ったことがサダの決定的な転機となった。「神の前に人はみな平等」というキリスト教の教えを知り洗礼を受け、矢島の生き方に見た“ずるいことをしてはならぬ”と自分を律する思いは生涯を貫くことになる。

1年半後の1883（明治16）年、県から呼び戻されて岩手県の女子教育の近代化を担いつつ、師範学校付属小学校への出勤前に早朝礼拝に通って信仰を深めた。1886（明治19）年、函館遺愛女学校に招かれて、再びミッションスクールの教師として寄宿舎生活が始まった。優秀な教師であり確かな信仰を兼ね備えた女性として、宣教師達に高く評価され信頼されていたサダであった。



本多ファミリー（年代不詳）

同年12月矢島が「東京婦人矯風会」を発足すると、サダは翌1887（明治20）年7月に「函館婦人矯風会」を設立した。「矯風会」は、男尊女卑等の弊風を正し、一夫一婦制の実現や公娼廃止を訴えるなど、信仰に立脚して女性の権利獲得を推進する運動団体であった。盛岡で出会った本多と結婚すると、米国遊学に旅立った夫の留守中を本多が創立した弘前女学院の校務の一切を引き受けるなど子育てとともに一層多忙な生活を送った（このころ貞子と改名）。

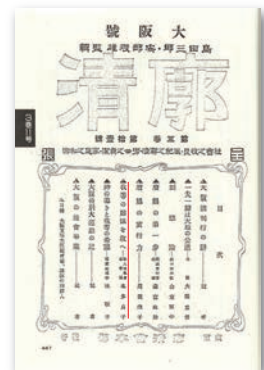
1890 (明治 23) 年、帰国して青山学院の前身東京英和学校校長となった本多は一家で構内に居住した。翌 1891 (明治 24) 年、女性の自活の道を開く教育の場として東京英和女学校に職業部が新設されると貞子は聖書の教師となる (職業部はのち青山女学院手芸部、さらに青山女子手芸学校となる)。ここで教師をしていた潮田千勢子も矯風会会員で、2人は中心メンバーとなって活躍し会の発展に尽力していく。公娼制度と闘うアメリカ人宣教師モルフィの裁判を矯風会は支援し陳情書を提出したが、その代表者は矢島・潮田・貞子の3人であった。



職業部卒業記念 1906 (明治 39) 年頃

1900 (明治 33) 年、矯風会は女性救済施設「慈愛館」を新築落成した。貧しい家族のために身を売るしかなかった女性達をかくまうシェルター兼職業学校である。1911 (明治 44) 年、山室軍平の救世軍と矯風会は団結して「廓清会」を結成し、公娼廃止運動は大きな盛り上がりを見せた。

晩年の貞子が進んで表舞台に立ったのはこの公娼廃止の講演会であった。「我等の姉妹を救へ」と題する演説では海外に渡って身を売り帰国もできない日本女性の窮状を訴え、同胞姉妹を救おうと呼びかけて多くの聴衆に感銘を与えた。演説を引き受ける女性が少なかった当時、この問題は男性だけでなく女性の問題であるにも関わらず女性の権利を主張する人々が「婦人問題の最も重要な此問題に思ひ及ばないといふ事は如何にも残念な事と思ふ」といった思いが関係者らに抱かれていた (『廓清』1914 [大正 3] 年 12 月)。そうした状況であればなおさら、貞子の行動は仲間達を喜ばせ勇気づけたことだろう。



『廓清』第 3 卷 第 11 号 (1913 年 11 月)

夫の死後は借家を転々としていたが、関東大震災で罹災して移り住んだ女学生寮清和女塾が終の棲家となり、1931 (昭和 6) 年、急性肺炎のため 69 年の生涯を閉じた。

米国の女性宣教師による“偉大なおせっかい”によって日本の女子教育は大きく進展したが、同時に、同志として尽力する日本の女性達の存在なしには広く社会に根付かなかったはずである。女子教育に向かわせた「神の前に人はみな平等である」との信念は国境を越えて共鳴し、男尊女卑の日本社会に抗した女性達の精神的紐帯となったといえるだろう。

キリスト教への偏見や迫害、また女性の地位が低く家のために忍従するしかなかった時代に、それぞれの持ち場で自己の限りを尽くした女性達がいた。その中であって、貞子もまた確かな足跡を残している。明治初期に設立されたミッションスクールを横断するように教師の経験を積み信頼を重ね、矯風会を拠点に日本女性の権利獲得のため女性同士の助け合い、連帯の中に生きた貞子の人生であった。

II 青山学院の女子教育とジェンダー

永井英子 - 海岸女学校から世界へ 1 -

小林 瑞乃 (現代教養学科日本専攻 准教授)

永井英子(松本ゑい)は、1866(慶応2)年、漢学者で学塾を営む松本貞樹と母なほの一人娘として千葉県木更津市に生まれ、我が子に天賦の才を見出した父の英才教育を受けて育った。幼少より神童の誉れ高く、6歳の時に千葉県庁に呼ばれて見事な墨書揮毫を披露して称賛され、8歳で一流書家と比べても遜色ない腕前であった。

1874(明治7)年に父の友人津田仙が開学した「救世学校」に入学して宣教師から英語を学び、翌年救世学校が「海岸女学校」と改称すると9歳の英子は最年少の寄宿生となる。ここで女子教育を受けながら日本語のつたない宣教師を補佐し、生徒ながら国語と漢文の教師を兼ねて働き約9年間在籍した。

1883(明治17)年、讃美歌編纂者のデヴィソンに懇願された英子は共同で翻訳・編集に務め、翌年日本語による初の讃美歌集『譜附基督教聖歌集』が刊行された。「不朽の名句」とされる「あまつましみずながれきて」(聖歌150番)に見るその美しい表現は、17歳の彼女の知性と感性の結晶といえるだろう。1885(明治18)年海岸女学校を卒業すると、四谷教会のバイブルウーマン(女性宣教師)として伝道生活に専念した。

1886(明治19)年に東京師範学校女子部(のち女子高等師範学校、現お茶の水女子大学)に入学した英子は「助教師」として外国人教師の授業通訳も担い、多忙を極めて過労のため休学を繰り返した。1890(明治23)年に2年遅れて24歳で卒業すると、華族女学校に就職した。師範学校在学中には、政府の企画したシェークスピア『リチャード三世の悲劇』実演のため英語優秀者として代表に選ばれ、2人の見事な舞台は絶賛された。相手役の帝大生代表は、後に



ヴァン・パテンと海岸女学校初期の生徒
Heathen Woman's Friend Vol.15-9
(1884年3月号)より後列右側が永井英子



英子の讃美歌草稿(1883(明治17)年)
永井元編『永井えい子詩文』より



幼時の筆跡
(1875(明治8)年9歳の時)
『永井えい子詩文』より



J.C.Davison 編『譜附基督教聖歌集』美以美教會雜書會社 1886年再版

駐米大使館一等書記官、中国公使、在ドイツ特命全権大使を歴任する日置益^{ひおきえき}であった。若き2人の俊英のみせた英語力は、男女最高学府の成果、即ち日本の力量を示す機会でもあり、関係者らを大いに満足させたはずである。

1892(明治25)年26歳で外務省翻訳官・哲学博士の家永豊吉と結婚するが、婚家破産による離婚で長男勝之助とも離別し、華族女学校や実践女学校の教員として生計を立てた。その後、1899(明治32)年、津田仙の紹介でクリスチ안의島田三郎が社長である毎日新聞社に入社し、以来草創期の数少ない女性の新聞記者として活躍した。日清・日露戦間期に勃興する資本主義下の凄まじい貧富の格差が進行する状況の中で貧民窟と呼ばれたスラム街を取材し、貧困層の子どもの問題に取り組んで奉仕活動も担い、廃娼運動や「婦人問題の研究」などの論説を執筆した。

1901(明治34)年頃から足尾鉍毒問題糾明に尽力し、矯風会の会員となり、鉍毒地救済婦人会と被災地を探訪して精力的な慰問と聞き取り調査を行い、その現状を59回にわたってみどり子のペンネームで新聞に連載した。記事の反響は大きく世論は盛り上がるが、1902(明治35)年警察に拘束され取り調べを受けるなど明治政府の弾圧を受けて記事掲載を断念し、連載をまとめたルポルタージュ『鉍毒地の惨状』が教文館より出版された。同年10月新聞社を退職した英子は、横浜から単身渡米した。その行動には日本への深い絶望を感じさせられる。



1902年頃の英子
『永井糸い子詩文』より



松本英子『鉍毒地の惨状』教文館1902年



被災地の現状を伝える挿絵『鉍毒地の惨状』より



目次

● 鉍毒地の惨状 第一編

● 何ぞは足尾鉍毒地救済婦人会編纂

● 目次

● 鉍毒地の惨状 第一編

● 鉍毒地の惨状 第二編

● 鉍毒地の惨状 第三編

● 鉍毒地の惨状 第四編

● 鉍毒地の惨状 第五編

● 鉍毒地の惨状 第六編

● 鉍毒地の惨状 第七編

● 鉍毒地の惨状 第八編

● 鉍毒地の惨状 第九編

● 鉍毒地の惨状 第十編

● 鉍毒地の惨状 第十一編

● 鉍毒地の惨状 第十二編

● 鉍毒地の惨状 第十三編

● 鉍毒地の惨状 第十四編

● 鉍毒地の惨状 第十五編

● 鉍毒地の惨状 第十六編

● 鉍毒地の惨状 第十七編

● 鉍毒地の惨状 第十八編

● 鉍毒地の惨状 第十九編

● 鉍毒地の惨状 第二十編

● 鉍毒地の惨状 第二十一編

● 鉍毒地の惨状 第二十二編

● 鉍毒地の惨状 第二十三編

● 鉍毒地の惨状 第二十四編

● 鉍毒地の惨状 第二十五編

● 鉍毒地の惨状 第二十六編

● 鉍毒地の惨状 第二十七編

● 鉍毒地の惨状 第二十八編

● 鉍毒地の惨状 第二十九編

● 鉍毒地の惨状 第三十編

● 鉍毒地の惨状 第三十一編

● 鉍毒地の惨状 第三十二編

● 鉍毒地の惨状 第三十三編

● 鉍毒地の惨状 第三十四編

● 鉍毒地の惨状 第三十五編

● 鉍毒地の惨状 第三十六編

● 鉍毒地の惨状 第三十七編

● 鉍毒地の惨状 第三十八編

● 鉍毒地の惨状 第三十九編

● 鉍毒地の惨状 第四十編

● 鉍毒地の惨状 第四十一編

● 鉍毒地の惨状 第四十二編

● 鉍毒地の惨状 第四十三編

● 鉍毒地の惨状 第四十四編

● 鉍毒地の惨状 第四十五編

● 鉍毒地の惨状 第四十六編

● 鉍毒地の惨状 第四十七編

● 鉍毒地の惨状 第四十八編

● 鉍毒地の惨状 第四十九編

● 鉍毒地の惨状 第五十編

● 鉍毒地の惨状 第五十一編

● 鉍毒地の惨状 第五十二編

● 鉍毒地の惨状 第五十三編

● 鉍毒地の惨状 第五十四編

● 鉍毒地の惨状 第五十五編

● 鉍毒地の惨状 第五十六編

● 鉍毒地の惨状 第五十七編

● 鉍毒地の惨状 第五十八編

● 鉍毒地の惨状 第五十九編

● 鉍毒地の惨状 第六十編

● 鉍毒地の惨状 第六十一編

● 鉍毒地の惨状 第六十二編

● 鉍毒地の惨状 第六十三編

● 鉍毒地の惨状 第六十四編

● 鉍毒地の惨状 第六十五編

● 鉍毒地の惨状 第六十六編

● 鉍毒地の惨状 第六十七編

● 鉍毒地の惨状 第六十八編

● 鉍毒地の惨状 第六十九編

● 鉍毒地の惨状 第七十編

● 鉍毒地の惨状 第七十一編

● 鉍毒地の惨状 第七十二編

● 鉍毒地の惨状 第七十三編

● 鉍毒地の惨状 第七十四編

● 鉍毒地の惨状 第七十五編

● 鉍毒地の惨状 第七十六編

● 鉍毒地の惨状 第七十七編

● 鉍毒地の惨状 第七十八編

● 鉍毒地の惨状 第七十九編

● 鉍毒地の惨状 第八十編

● 鉍毒地の惨状 第八十一編

● 鉍毒地の惨状 第八十二編

● 鉍毒地の惨状 第八十三編

● 鉍毒地の惨状 第八十四編

● 鉍毒地の惨状 第八十五編

● 鉍毒地の惨状 第八十六編

● 鉍毒地の惨状 第八十七編

● 鉍毒地の惨状 第八十八編

● 鉍毒地の惨状 第八十九編

● 鉍毒地の惨状 第九十編

● 鉍毒地の惨状 第九十一編

● 鉍毒地の惨状 第九十二編

● 鉍毒地の惨状 第九十三編

● 鉍毒地の惨状 第九十四編

● 鉍毒地の惨状 第九十五編

● 鉍毒地の惨状 第九十六編

● 鉍毒地の惨状 第九十七編

● 鉍毒地の惨状 第九十八編

● 鉍毒地の惨状 第九十九編

● 鉍毒地の惨状 第一百編

II 青山学院の女子教育とジェンダー

永井英子 - 海岸女学校から世界へ 2 -

小林 瑞乃 (現代教養学科日本専攻 准教授)

だが、アメリカでの英子はなお一層バイタリティーにあふれていた。1905 (明治 38) 年セントルイス万国博の売り子として大成功して商品は飛ぶように売れ、振り袖姿の「タマ・イデ」(井出玉子)として日本及び日本人を語る講演会は好評を博して新聞でも報じられた。翌 1906 (明治 39) 年 1 月、元新聞記者で保険代理店を営む永井元と結婚し、4 月にサンフランシスコ大地震で被災すると夫妻は救済委員会を立ち上げ、多くの日系避難民の力となって奔走した。かつて濃尾大地震 (1891 年) の義捐金運動に尽力した英子には、当然の行動だったのかもしれない。また、日本人の子どものために教会で夏期学校を開くなど、その言動にはどこにあっても奉仕の精神が息づいている。

1906 年 7 月、40 歳の英子はカリフォルニア大学バークレー校の夏季講習に通って英文学やフランス語講座などを受講し、9 月からは特科生として入学してロマンス語学科でフランス語やスペイン語などを学んだ。あまりの優秀さ故に「ザ・スコラー」と呼ばれた英子は、1910 (明治 43) 年には 105 以上の卒業要件を満たす単位を取得したが、正科生でないため学位授与はなされなかった。翌年単位継続制度のあるパシフィック大学に入学し、1912 (明治 43 / 大正 元) 46 歳でバachelor (学士) 及びマスター・オブ・アーツ (文科修士) の学位を授与され卒業した。

以後は元と二人三脚で保険業に専念し、驚異的な成功を取めた。文才を宣伝・広告に生かしてダイレクトメールで勧誘するなど当時として極めて画期的な手法で新規契約者を獲得し、全米保険代理店チェーンの中で高額契約成功者として「20 万ドルクラブメンバー」に選ばれる栄誉を受け続け、ビジネスでもその才能を発揮したのであった。

1923 (大正 12) 年頃からは読書に明け暮れ、フランス語原典でヴォルテール、ルソー、フローベール、モーパッサン、バルザックなどの全集を一心不乱に読破し、死の直前までエミール・ゾラを読み進めていった。だが、この頃から病魔に侵され生活は不自由になり、やがて外出も出来なくなって病苦と闘いながら、「クリスチャン・サイエンス」に傾倒して医



"Little Japanese Woman Tells of Her Home Life" 講演について伝える新聞記事 (1905年『セントルイス新聞』) 『永井英子詩文』より



1912 年 大学卒業時の英子 『永井英子詩文』より



東部旅行中の英子と元 (右側の 2 人) (1913 年シカゴにて) 『永井英子詩文』より

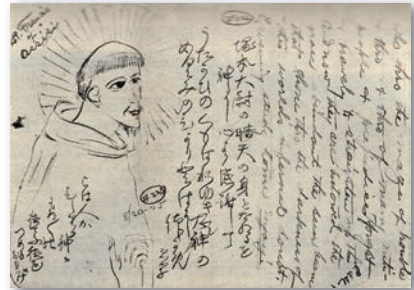
療を拒否した。元は1926(大正15/昭和元)年頃から英子の看病だけに全てを捧げ、1928(昭和3)年4月英子は夫に看取られサンフランシスコの自宅でその生涯を終えた。62歳、死因は卵巣がんだった。

一周忌にあたって、元は1400頁にも及ぶ大著『永井糸い子詩文』(非売品)を出版するが、そこには夫婦愛とともに同志的な絆をも感じさせられる。元は聡明な英子を敬愛し、その存在証明として彼女の軌跡と思想を後世への遺産として残したかったのである。ここには明、日清・日露戦争下の日本、さらに第一次世界大戦時のアメリカを知る英子が、1918(大正7)年、『在米婦人新報』に「嗚呼戦争」「軍国の婦人」などを発表し、1926年「如何にして戦争を世界より消滅せしめんか」、1927(昭和2)年には論説「非戦のために戦へ」など非戦論を書き続けていたことも記されている。

見知らぬ異国で再出発し非凡な能力を伸長させた英子は、元の理解と支えによって知的欲求・向学心に突き動かされるように存分に生き抜いた才気煥発な女性であった。と同時に、子どもと貧困、被災者、鉱毒被害者など社会の底辺にあえぐ人々のために知力の限りを尽くす姿勢を基点として、非戦論へと持論を展開させたジャーナリストとしての不屈の魂をも見る思いがする。

イギリス産業革命の時代に救貧運動など社会問題に熱心であったメソジスト派のミッションは日本の女子教育をも牽引した。その奉仕の精神と教育を体現し、一身の生の花開かせた女性の先達に英子がいる。その後裔の位置にある者として、偉人としてではなくむしろ等身大の女性として、多くの矛盾に直面しながら人生を開拓し続けた英子の生き方を胸に刻みたい。

参考文献：永田圭介『あまつましみずー異能の改革者永井英子の生涯』教文館、2018年
府馬清『松本英子の生涯』昭和図書出版、1981年



「聖フランシスコ」(手記の中に描かれたもの 1925年8月20日)
『永井糸い子詩文』より



『永井糸い子詩文』表紙装丁
(手記の一部がデザインされている)



手記の一部 『永井糸い子詩文』見返し前より



糸い子つづれ草原稿の一部 『永井糸い子詩文』見返し後より

II 青山学院の女子教育とジェンダー

小林 瑞乃 (現代教養学科日本専攻 准教授)



◇第三百七十一號(昭和四年三月)目次◇

度節に因みて詠める(正午の祈)	久遠
第三十八回大會來る	布川
私運は集つた此處に歸す	白眞
國民性批判(會座談)	落路
久井野實・大塚東子・前田房子・ガントレット恒子	實路
常而の問答題	心(20)
自然化する二十九歳法案	
麻和聯會の三續相の宣明	
回廊 人 想 櫻(三)	
公明制度最上京師實政記	
運動のあと	
世界の女性(シロジニ・タイヂュウ)	
訪聞記(本多貞子夫人・川秀子夫人)	
婦人公長権上稱日の機会を祝して	
エルサレム最後の日	
支那のおとづれ(矢阪・吳・仁川)	
編輯後記	

久遠 布川 白眞 落路 實路 心(20)

西守守 戸千 川本 内屋 天 行東 東 子道 卓江 静 井 藤 石守 塚屋 道 枝 恒子

『婦人新報』1929(昭和4)年3月号より表紙と目次(本多貞子訪問記掲載号)

『婦人新報』は日本基督教婦人矯風会の機関紙。1895(明治28)年創刊。買春反対、一夫一婦制実現、参政権獲得など日本の女性に人権のなかった時代の婦人解放運動の歩みと今後の課題を知るための貴重な資料といえるものである。

Ⅲ 青短のリベラルアーツとジェンダー

英語教育と女性の視点

鈴木 直子 (現代教養学科日本専攻 教授)

青短開学ののちしばらくの間、日本における女子の大学・短大への進学率自体がわずか 2% 台の狭き門であり (学校基本調査によると進学率 3.0% を超えるのは短大で 1960 年、四年制で 1961 年)、迎える青短の教員側も、これら選ばれた女子学生たちに「ほんものの学問とはどういうものかを理解させたい」との思いを共有し (『青山学院女子短期大学の歩み』108 頁)、「女子向け」に手加減・平易化することなく教養を授けようとの気概に溢れていた。

しかし、女子高等教育への逆風が吹き (1962 年のいわゆる女子大生亡国論など)、女子短大が女子向けの教育コース=ジェンダートラックとして定着すると、青短の教育はそうした男女役割分担に抗う武器として、女子への教養教育を措定するようになっていったと考えられる。2018 年に発行された『青山学院女子短期大学六十五年史文集編』における卒業生の手記にも、次に掲げるように、当時の本学の女子教育の精神がうかがえる。

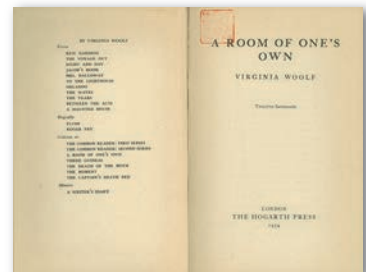
「君たちはお嫁に貫われていくというような結婚は、断じてしてはいけない」「結婚は対等な男女の関係であるべきです」「君、花嫁修行って言いますがね、料理だ、洗濯だ、裁縫だなどは、結婚したらいやでも一生やらなければならないんだから……。今、そう、今しかできないことを夢中になってやるべきです」(という岩浅農也先生 (一般教育科目「東洋史」担当)の言葉に)なんだか目の前がパッと明るくなったような気がした。(K.R. さん 1969 年英文科卒業)

では、本学では具体的にどのような授業内容を提供して、女子学生たちに狭い意味の女性役割に甘んじることなくその可能性を花開かせ、「覚醒した女性」を育てようとしていたのだろうか。

学生便覧等で過去に遡って授業内容を確認してみると、特に英文学科と全学英語教育を中心に、今日でいうジェンダー視点を取り入れた授業が早くから意識的に試みられていたことがわかる。すでに 1970 年代には、英米の女性作家を積極的に紹介する機運があった。ブロンテ姉妹やジェーン・オースティンはもとより、キャサリン・マンスフィールド、エリザベス・ギヤスケル、ジョイス・キャロル・オーツ、フラナリー・オコナー、マヤ・ヴォイチェホフスカ、ヴァージニア・ウルフ、ジョージ・エリオットなど、英米女性文学が英語・文学教材として取り上げられ、そのラインナップを見ても、ジェンダーの視点抜きでは語れない作家が多いことがわかる。

1978 年の英文講読 (佐野弘子先生) の講義内容には以下のように、すでにアメリカで定着していた女性学を積極的に取り入れたいとの意図も明確に書かれていた。

近年ほとんどのアメリカの大学に、Women Studies「女性学」という名の講座が開かれるようになり、今夏には初の国際女性学会の日本会議も予定されている。この機会に、文学の中で女性によって描かれた様々な女性の生き方を考えてみるのも、意義あることと思われる。



Virginia Woolf "A room of one's own"
London: Hogarth Press, 1929 (短大図書館蔵書)

この時期、積極的に授業に女性学を取り上げたエリザベス・クラーク先生をはじめ、高島敦子先生・菅幸子先生・向山泰子先生など多くの先生方が、女性の視点を導入した教材を意識的に選んでいた。特に1980年前後からは、現在のジェンダー言語学の祖ロビン・レイコフ、レズビアンとしても知られる文化人類学者マーガレット・ミード、第二波フェミニズムの古典であるベティ・フリーダンやアドリエヌ・リッチなどが教材名に散見される。

こうしたフェミニズムの基本文献が青短の英語教材としていち早く取りあげられていたことは大変興味深い。

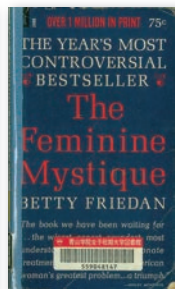
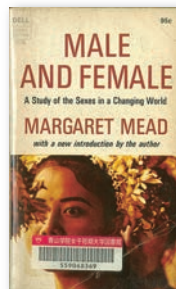
女性への英語教育において女性学・ジェンダー知を導入するこうしたスタイルは、1999年に全学必修科目として新規開講された「共通英語」科目群に引き継がれた。「共通英語」は「女性の生き方」の他、「人間」「社会と文化」「言語」「生命と自然」の5分野を主題としつつ英語の基礎教育を行う科目群である。2012年のカリキュラム改革を経て、その精神は現在にも引き継がれている。女性が主体的に学ぶために、女性に関する知を積極的に取り入れた本学の英語教育の原点は、1970年代に端を発し、1980年代に定着していった。

家政学科でも、1981年の専攻科家政学特講の授業内容において「女性の自律性への選択を一層自覚するよう授業を進めたい」との文言がみられるなど、フェミニズム・ジェンダー論の進展をいち早く取り入れた教育が目指されていた。また1989年の必修科目「生活言論Ⅰ」（村武精一先生）は「家と女性」をテーマとし、女性の地位と役割を女性史の観点で学際的に紹介しようとしていたことが学生便覧からうかがえる。

児童教育学科には女性学と冠する授業はないが、子どもを取り巻く環境としての家庭や母性等に関わる授業は数多く、菅沼真砂子先生らを中心に、意識的に女性の視点が取り入れられていた。



英文学科教員集合写真（1976 卒業アルバムより）
前列左からクラーク先生、向山先生。後列中央が森泉先生、その右が高島先生



左：Margaret Mead "Male and Female: a Study of the Sexes in a Changing World", New York: Dell, 1968(c1949)
右：Betty Friedan "The feminine mystique", New York: Dell, 1964(c1963)（短大図書館蔵書）



出雲先生授業風景（1994 卒業アルバムより）



菅沼先生授業風景（1991 卒業アルバムより）

Ⅲ 青短のリベラルアーツとジェンダー

青短における女性学の展開とジェンダー教育

鈴木 直子 (現代教養学科日本専攻 教授)

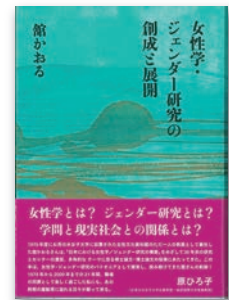
1970-80年代において、女性の視点を積極的に授業に導入してきた青短は、ついに女性学講義を開講する。女性学と銘打つ授業が初めて置かれたのは、1984年、英文学科英文学専攻の「女性学」(通年・大林道子先生)だった。翌年から英語学専攻にも置かれ(同じく通年・大林道子先生)、1987年には教養学科も、英文学科「女性学」を同時開講する形で設置した。また専攻科でも、1986年、英文専攻・家政専攻共通の科目として「女性学」が設置される。1990年には家政学科も「女性論」(半期・館かおる先生)を開講するにいたり、本学の女性学関連授業がスタートしたのである。

英文学科「女性学」などを担当した大林道子先生(1984-1999年まで担当)は、70年代後半にカリフォルニア州立大学サクラメント校で女性学・社会学を学び、日本のリプロダクティブ・ライツ研究の草分けとして現在でも重要文献として挙げられる『助産婦の戦後』(勁草書房、1989年)の著者である。

また家政学科「女性論」を担当した館かおる先生(1990-95年まで担当)はお茶の水女子大学ジェンダー研究センターの立ち上げ・維持に深く関わり、2004-2007年には同センター長(現ジェンダー研究所)を務めたお茶の水女子大学名誉教授で、多くの女性学・ジェンダー研究書を編纂、近著に『女性学・ジェンダー研究の創成と展開』(世織書房、2014年)がある。



大林道子『助産婦の戦後』
勁草書房、1989



館かおる『女性学・ジェンダー研究の創成と展開』世織書房、2014

1998年には全学共通教育科目(主題科目)として「女性学Ⅰ～Ⅳ」が設置され、英文学科・教養学科「女性学」は廃止されてこちらに引き継がれた(家政学科「女性論」は学科独自科目として2013年の学科廃止まで継続)。それにより、各学科が独自においていた女性学を、青短の全ての学生が学ぶことが可能になったのである。2000年代には藤田和美先生、柚木理子先生、原葉子先生など、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター(現研究所)チルドレンとも言えるお茶大出身者たちが青短の女性学教育を担った。2012年カリキュラム改革で女性学科目が現代教養コア科目群「女性と現代」に引き継がれたのちも、現在に至るまで教鞭をとっておられる。



出雲朝子『女性の文章と近代
書きことばから見たジェンダー』
花鳥社、2019

女性学講義の展開に並行して、各学科でも、専門科目においてジェンダー視点を導入する例が多く見られるようになっていった。

国文学科は女性学講義の導入という観点からは少し出遅れたが、1990年代に入ると、金井景子先生が近代女性作家をジェンダーの視点から紹介する授業を展開、また出雲朝子先生も日本語学の講義において毎年のように女性語・女言葉をテーマとして取り上げた(2019年『女性の文章と近代 書きことばから見たジェンダー』を出版されている)。それ以降、多くの授業で女性の視点・ジェンダーの視点が積極的に取り入れられた。

青短の女性学教育をリードしてきた英文学科でも、1990年代に入るとジェンダー視点の授業はさらに数を増し、アリス・ウォーカーやトニ・モリソンといった黒人女性作家が取り上げられるなど、ダイバーシティの思想に繋がる第三波フェミニズムにいち早く呼応していたことがわかる。また森泉弘次先生の授業では、ジェンダー文学批評理論家として知られるショシャナ・フェルマンが取り上げられるなど（1990年に森泉先生が訳書出版）、ジェンダー理論が本格的に導入されていたこともうかがえる。



左: Toni Morrison "Sula", New York: Knopf, 1974(c1973)
右: 森泉弘次訳、ショシャナ・フェルマン『ラカンと洞察の冒険
現代文化における精神分析』誠信書房, 1990

児童教育学科は2006年に三年制子ども学科に改組した際、それまでの教育理念を凝縮した授業の一つとして「女性・環境・平和」というオムニバス講義形式の授業を創設、女性の視点を学科の重要な軸のひとつとして位置づけ、今日に至っている。

こうして、女性学講座の成立と展開を経てジェンダー教育は次第に浸透し、キリスト教教育・平和教育と並び、青短のリベラルアーツ教育の根幹をなしていったのである。

『青山学院女子短期大学六十五年史文集編』には、かつて青短の女子教育・ジェンダー教育がいかなるものであったのか、その一端をうかがうことのできる卒業生の言葉が数多く収録されている。その一部を下記に紹介したい。

黒人女性を主人公にしたこの有名な作品（『カラーパープル』）は、私にとって初めて、ジェンダーと差別の問題を考えるきっかけとなりました。（K.A.さん 1990年英文学科卒業）

女性学や生命倫理の授業ではジェンダーや女性の生き方について学習し、社会人になった今、あの時に学んでいてよかったな、と思うことが多い授業の一つです。[...]女性が自立して社会の一員になり、たくましく生きていくにはどのような選択をしていくのか[...]を学ぶことができましたと感じます。（Y.A.さん 2010年家政学科卒業）

このように、「覚醒した女性」の育成を目指す本学において、女性とジェンダーの観点に基づくリベラルアーツ教育実践は、1970年代以降の英語教育においてまず取り入れられ、次第に他学科でも展開されたのち、共通教育科目「女性学」科目群を経て、現在の現代教養コア科目群「女性と現代」へと引き継がれてきたといえよう。

青短における教育はあと数年で終わりを迎えるが、戦後においてつねに女子高等教育をリードし、「覚醒した女性」の育成を一貫して目指してきた本学の精神の一端は、女性が現代社会を生きる力としてのジェンダー知の教育・研究へと集約され、2020年4月、満を持して開設される「ジェンダー研究所」に結晶したのである。2021年4月以降、青山学院大学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターとして、青山学院の中に着実に引き継がれることとなる。

女性学の展開

鈴木 直子 (現代教養学科日本専攻 教授)

	英文学科英文学専攻 通年科目	英文学科英語学専攻 通年科目	教養学科 通年科目	家政学科 半期科目	専攻科		
	女性学 1984-1997	女性学 1985-1997	女性学 1987-1997	女性論 1990-2013	英文専攻「女性学」1986-1993 英文専攻「女性学特講」1994-2013 家政専攻「女性学」1986-2013		
1984	大林道子「妻・母・女」						
1985	大林道子	大林道子「産む性としての女」					
1986	大林道子「産む性としての女」	Elizabeth J. Clarke (Women have many roles in society)			大林道子「産む性としての女」		
1987	Elizabeth J. Clarke (Women have many roles in society)	大林道子「産む性としての女」	a Elizabeth J. Clarke (Women have many roles in society) b 大林道子「産む性としての女」		大林道子「母性を考える」		
1988	同上	同上	同上		同上		
1989	同上	大林道子「誰のための“生殖管理”」	Elizabeth J. Clarke (Women have many roles in society)		大林道子「産む性としての女」		
1990	同上	同上	同上	館かおる(ジェンダー意識の形成)	同上		
1991	Elizabeth J. Clarke (In the 1980's women's life styles changed)	同上	Elizabeth J. Clarke (In the 1980's women's life styles changed)	館かおる(ほぼ同上)	同上		
1992	同上	大林道子(性の商品化・生殖管理)	同上	館かおる(ほぼ同上)	大林道子		
1993	落合明子(米国女性史・黒人女性史)	同上	落合明子(米国女性史・黒人女性史)	西山千恵子(前期)館かおる(後期)(女性をとりまく社会通念、規範意識、制度など)	大林道子(出産・中絶・受胎調節・人口問題など)		
1994	岡田則子(女性史・平塚らいてう)	大林道子「女の身体観と性差別」	岡田則子(女性史・平塚らいてう)	西山千恵子(A-B組) 館かおる(C-D組)	同上		
1995	大林道子「女の身体観と性差別」	岡田則子(女性史・平塚らいてう)	同上	館かおる(女性をとりまく社会通念、規範意識、制度など)	同上		
1996	岡田則子(女性史・平塚らいてう)	大林道子「女の身体観と性差別」	同上	太田孝子(家族、夫婦別姓、女性の社会進出、介護など)	同上		
1997	同上	同上	同上	同上	同上		
共通教育科目(外国語)		共通教育科目(主教科目) 半期科目			家政学科 半期科目	専攻科	
共通英語 1999-2011	女性学 I 1998-2011	女性学 II 1998-2011	女性学 III 1998-2011	女性学 IV 1998-2011			
1998		岡田則子「近代女性史と平塚らいてう」	岡田則子「現代の女性とその課題」	大林道子「性の商品化と性暴力」	大林道子「産むこととその周辺」	海妻径子「見えにくくなった「女性」が抱える問題」を掘り起こす	大林道子「産む、産まない、産めない」
1999	共通英語「女性の生き方」開始(他に「人間」「社会と文化」「言語」「生命と自然」)	同上	同上	同上	同上	同上	同上
2000	同上	同上	同上	藤田和美「性表現と性の商品化」	藤田和美「女性と表現」	同上	藤田和美「女性解放思想の歴史」
2001	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
2002	同上	同上	同上	同上	同上	海妻径子「身近な「女性」が抱える問題」を掘り起こす	同上
2003	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
2004	同上	同上	同上	同上	同上	海妻径子「女性と職業の問題から見てくるもの」	同上
2005	同上	岡田則子「近代女性史概説」	同上	同上	同上	同上	同上
2006	同上	同上	同上	同上	同上	原葉子「近代社会のジェンダー規範と身体性を読み解く」	同上
2007	同上	同上	柚木理子「現代の女性とその課題」	同上	同上	原葉子「暮らしの中のジェンダー」	同上
2008	同上	柚木理子「パートナースHIPの女性学」	柚木理子「女性が働くことを考える」	同上	同上	原葉子「生活とジェンダー」	同上
2009	同上	同上	同上	同上	同上	原葉子「女性の生き方とジェンダー」	同上
2010	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
2011	同上	柚木理子「女性が働くことを考える」	柚木理子「女性の生き方を考える」	藤田和美「ジェンダー規範の形成と変容」	同上	同上	同上
旧カリキュラム/新カリキュラム(現代教養コア科目 第I群【女性と現代】)							
2012	(新カリキュラム「共通英語A~G」)	柚木理子「女性が主体的に生きることを考える」(=新カリキュラム「女性と現代A」)	原葉子「現代の家族を考える」(=新カリキュラム「女性と現代B」)	藤田和美「ジェンダー規範の形成と変容」	藤田和美「性暴力と性の商品化」(=新カリキュラム「女性と現代特論C」)	荒木純子「身体を通じてジェンダーを学ぶ」(=新カリキュラム「女性と身体」) 森下春枝「女性と健康・命・長寿社会」(=新カリキュラム「女性と健康」)	同上
現代教養コア科目 第I群【女性と現代】							
2013	「共通英語A~G」	柚木理子「女性と現代A」	原葉子「女性と現代B」	藤田和美「女性と現代特論C」	荒木純子「女性と身体」	森下春枝「女性と健康」	同上

※「」は授業タイトル、授業タイトルの記載がない授業は()内に授業内容を要約した

Ⅲ 青短のリベラルアーツとジェンダー

エリザベス・クラーク先生と青短の女性学

八耳 俊文 (第8代 青山学院女子短期大学学長)

エリザベス・クラーク先生は1962年度から63年度、1972年度から92年度と英文学科の教授を務め、オーラルイングリッシュをはじめ英語の授業を担当した。また学院宣教師として学内の宗教活動に関わり、修養会や礼拝等で先生の話聞いた覚えのある卒業生も多いのではなかろうか。

先生は1924年9月23日、アメリカのウィスコンシン州リッチランドセンターで、メソジスト監督教会の牧師の家庭に生まれた。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトも同地の出身である。1946年ウィスコンシン州立大学を卒業。理科の教員となるコースを専攻した。大学では「歴史とは何か」「人間とは何であるか」「自分は何をすべきか」を考えたとき、本学の宗教活動委員会のインタビューに答えている(『みずさき』47号)。

中学や高校で理科を教えたあと、1948年11月5日、北米メソジスト教会伝道局婦人部派遣の宣教師として来日、福岡女学院中学・高校で英語と聖書を教えた。1951年帰米。高校での教師経験や、北欧での滞在ののち、1954年、ニューヨークのコロンビア大学で英語の教授法を、ユニオン神学校で神学を学ぶ。1955年再来日。青山学院高等部、福岡女学院中学・高校での教員を経て、1962年4月、本学英文科教授就任。オーラルイングリッシュを担当した。「若さを発揮しての活気ある授業」(『青山学院女子短期大学新聞』1962年5月2日号)と期待されたが、翌1963年度に長崎の活水学院の校長代理となり、授業はこの時1年で終わった。1964年度より69年度まで活水学院院長、短大学長を務める。1970年から72年、ウィスコンシン大学教育行政研究科大学院で東アジアの高等教育の研究に従事。1972年10月、本学英文学科に戻り、英語・英文学を教えた。1993年3月退職。名誉教授の称号が授与された。この間、青山学院の理事、評議員、1986～87年度には女子短期大学英文学科主任、88～89年度には同学宗教主任を務めた。退職後はカリフォルニア州のクレアモントの退隠牧師・宣教師・使徒伝道者たちが住むコミュニティで暮らす。2019年12月7日逝去。享年95。



1985年



クラーク教授 今年から、新しく短大でオーラル・イングリッシュを担当する先生、若さを発揮しての活気ある授業は、時に、学生を驚かす程の威力がある、非常に魅力ある。この先生のオーラルの授業をうけると、一年後には、どのくらいまで実力がのびるか、ほんとうに期待しています。

『青山学院女子短期大学新聞』1962年5月2日号より

青山学院女子短期大学で「女性学」が開講されたのは1984年度で、英文学科の83年度入学生の2年次選択必修科目の一つとして置かれ、84年度より授業が行われた。担当教員は大林道子氏(兼任講師)であった。大林氏は1976年から79年の3年間、カリフォルニア州立大学サ

クラメント校の大学院で社会学を専攻、女性学を聴講していた。帰国後、戦後の助産婦の研究を進め（その成果は1989年に著作『助産婦の戦後』として発表）、本学では「妻・母・女」をタイトルに、結婚・出産・母性・家族などの問題を教えた。日本では大学で女性学の講義が設けられるのは1974年の和光大学が最初とされるが、広がり始まりは83年頃であり、本学の開講もこの早い時期での導入にあたる。

1986年度からはクラーク先生も「女性学」を担当した。この年度以降、学内では英文学科のみならず英文専攻などの専攻科や、また他学科生にも「女性学」は開かれた。大林氏は産む性の視点から「女性学」の授業を行ったのに対し、クラーク先生は女性の社会的役割や歴史上の地位向上の動きを講義した。先生が担当の「米国研究」でもアメリカの女性を取り上げられている。『総合文化研究所年報』には戦前の日本の女子専門学校の起源と展開についての論考を発表されている（第2号）。

先生は世界の社会や教育の動きに常に関心を向け、異文化体験や多様性を重んじられ、大きな視点から発言された。アジアと連携する女性の育成も先生の主張であった。私たちの地域社会、私たちの世界が前向きで健康的な関係に向かって変わってゆくことを目指し、青山学院の学ぶすべてのものに最後までエールを送られた。『學藝』32号（1992）



クリスマス礼拝で（1993卒業アルバムより）

には先生が人生を振り返り、これからの女性を励ますメッセージ「山を動かす女性たち」を寄稿されている。2000年11月16日の女子短期大学開学50周年記念式典にはアメリカより出席、「この時のためにこそ」と題して説教され、女性が男性と同等の権利と責任をもって社会に参加する必要性を訴えられた。



グリーンパーティーで（1988卒業アルバムより）



クラーク先生からの手紙

アメリカの文学批評家、キャロライン・ハイルブルンは五十歳のとき、*Reinventing Womanhood*（女性としての自分をもう一度認識し直すこと）（1979）を書き始めました。そしてそれは彼女にとっては「開花の時」だったのです。彼女は二十世紀はじめのフェミニストであり、シャーロット・パーキング・ギルマンの書いた経歴を紹介しています。

“ある日、私たち女の子は「人生でいいのは何歳かしらね」と話しあっていました。当時、私たちは十八歳ぐらいでしたが、いちばんいいのは十八歳だという意見がほとんどでした。しかし私は五十歳だと言ったのです。まさか？ どうして？ 私は説明しました。「私が五十歳になった時には、みんなその気になれば、私の意見を尊重してくれるでしょう、働かなくても、そんなに歳ではないでしょう」もう少し注を付け加えますと、ギルマンは、この話を彼女が五十歳のときに思い出したのです。ちょうどその当時、彼女は女性のための新しい雑誌 *Forerunner* を編集し、出版しようとしている時で、この雑誌はまさに、近代社会における女性の地位を扱ったものでした。1916年、この雑誌が終了したとき、彼女は自分がこのために、本二八冊ほどの資料を書いていたということがわかったのです。

このエッセイを読む人は、十九歳か二十歳なので、「人生の半分（五十歳かそれより少し上）が終るまで、その人の価値はわからない」というギルマンの説に失望するでしょう。でも、これは励みになるのではないのでしょうか。つまり二十代や三十代で、すべてをやりとげることはできないのだということの勇気づけでもあるのです。人生のそれぞれの段階には、大きな可能性があります——二十代のあなたは、優雅な時代に属しています。（仕事についての重い責任もない、家族の義務についての責任もありません）思ってもみなかった興味を開拓したり、未開発の才能を磨いたりすることもできますし、世界の境界線を地理的にも知的にも拡張したり、未知の、まだ試みられていない研究や才能を試すこともできます。このような試みのすべては、あなたがもっと責任を負わされるようになったとき、すばらしい方法で実現されるでしょう。このような大きな機会は、過去の実績によって得られるのです。

若い男性たちの場合、今歩んでいる道は、父親たちの道とは少し違って、就職するやいなや、きびしい訓練と、つるプレッシャーの縮図を示しています。しかし今日の若い女性たちにとって、その世界は二十五年前とは違い、意味深く変化しました。あなたが今、直面している挑戦は、母親たちの体験した挑戦よりずっと大きなもので、おそらくもっと困難なものになるでしょう。なぜなら、あなたが今日の女性は、未踏の道——標識や道しるべのほとんどない野道——を歩くように、すでに確立された重い慣習というかん木の茂みや、深いやぶを切り開いて進んでいかなければならないからです。創造的な未来にいちじるしく対立して障害となる伝統や因襲の山を、私たちは越え、その山を動かさなければなりません——男性と女性が平等に公正に共に生き、共に働く新しい共同体を築く可能性を開くために。

ハイルブルンの感銘深い本にもどると、彼女は女性たちが互いの一つとなって、後にくる人のためにもお互いを励まししながら、女性としての自立を見つめるようにと求めています。彼女は社会が求めているこれまでの型にはまった女性の役割を受け入れるよりは、あ

えて“もう一度女性であることを見直す”ことを私たちに呼びかけています。ハイルブルンは女性が受身ではなく、自信と勇気をもってはっきりとものを言い、それにとまらぬ責任を全うすることを求めています。そしてそれによって、男性の価値観と男性の役割のひな型に支配された社会へ、十分に入って行くことができるとしています。私たちが全くの人間として互いに価値を認める時のみ、真の人間的な共同体が生まれてくるのです。このためには、私たちはリスクを伴った生活の変化も覚悟しなければなりません。

イギリスの女性作家、ヴァージニア・ウルフは1920年代に「自分だけの部屋」という重要な本を書きましたが、その中で彼女は、女性が社会へ創造的に関わるための必要条件をはっきりと述べています。簡単に言いますと、彼女の論旨は、女性が創造的に社会に関わり、自己を充分に形成するためには、自分だけの部屋を持たなければならないということです。つまり女性は家族にも邪魔されることのない、自分だけの空間を持たなければならないということです。家族のいろいろな要求や、横暴から逃れる隠れ家、とても呼ぶべき空間のことです。空間だけではなく、時間もまた必要なものです。そしてウルフが三番目にあげているのは、“年に五百ポンド”という条件です。言いかえると、空間と時間を許すだけの十分な経済力ということです。私たちの人生においては、静かに引きこもることも、不可欠な場合がありますが、ウルフは世の中から退き離れた場所ので、静かに考えごとをするのを勧めているではありません。そうではなく、私的な、または公的な世界を含めて、女性の全人間性を求めるための、さまざまな条件を示しているのです。

ハイルブルンとウルフは私たちに自立した個性を作る可能性を示してくれますが、私には重要な手ぬかりが一つあるように思われます。つまり彼女たちは二人とも、人生には私たちひとりひとりに、使命をもって献身し奉仕する権限が与えられているということを見無視している点です。人生——才能も——は神から与えられたもので、ただ自己満足のためでなく、神の賜物を他の人びととともに分かちあい、他の人びとに役立てるために受入れるのだと私は信じています。多くの方が自己満足のためではなく、私たちひとりひとりに与えられた神の賜物を成就するために、この新しい個を作ろうとしていることが思い起されます。“だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって・・・”（コリントの信徒への手紙 二 5.17-18；新共同訳）

日本到着（1948年11月5日）以来、44年をふり返ってみると、年月を通じての感動的な私の人生の旅の一步一步を導いて下さったのは、すばらしい神の摂理だったと信じています。この旅は自由、自立への巡礼の旅であり、それはウルフやハイルブルンが提唱してきたことと一致するもののように私には思われます。少女時代や大学時代の体験が、想像の世界を超えた方向へ歩きはじめる、価値ある才能を、後に発展させるようになったことを、当時の私にどうして理解できたでしょうか。この仕事を引きうけ、限りなく拡がる危険に立ち向う私に、たえず力を与えて下さったのも神でした。

私の人生の構成要素のいくつかを、いっしょに回想してみましょ

う。私の父は牧師で、母は居住地および州の教会婦人会の会長でした。成長するにつれて、わが家には人生のあらゆる道をたどってきた人びとが温かく歓迎され、その人たちは豊かな体験やさまざまな考えを、私に話してくれました。母はよく突然の食事客に見舞われますが、うろたえたり、取り乱したりせず、快い愛想よさで、父の訪問客を心からもてなすのでした。テーブルについた客たちは、私の生活に未知の世界をもたらしてくれました。まだ若い高校生の頃、私はインドやビルマやラテン・アメリカから来た感銘深いクリスチャンや、アメリカ南部から来た黒人たちに会いました。教会のサマー・キャンプでは、アフリカ諸国、中国、日本からの宣教師たちが話をしたり、リーダーシップをとりました。こうして、私の世界観はどんどん拡がっていきました。

大学時代に教室の外で起った出来事、キャンパス内で出会ったサークルの人びと、キリスト教学生センター、アメリカキリスト教全国学生会議への出席——すべてこれらのことが、1948年の初冬（11月）日本へ来る最初の決心をするきっかけになったことは確かです。こういう機会が高校での体験をさらに強化させ、拡張させて、ライフ・ワークの道へ私を導いてくれたのでした。教会のサマー・キャンプへの顧問としての定期的な参加は、結局、1945年ネブラスカでの夏期教会巡回となり、教会青年グループの計画を発展させるために、高校生たちと一しょに働くようになりました。これらの機会が後に重要な技術を引き出し、磨いてくれる結果になりました。また、こういうことすべてが、日本での未知への危険や、宣教師奉仕活動にいとむ私の決心に重大な貢献をしたのでした。

With Uncommon Kindness は、アメリカの若いクリスチャン五十人の体験を綴った本のタイトルです。私もそのうち一人で、第二次世界大戦後の復興と再建のために奮闘する、荒廃した日本に1948年の晩秋、私は来日したのでした。それは歴史上、先例のない時期で、このタイトルは、私と日本との衝撃的な出会いを明らかにしています。三年前まで続いていたあの残酷な日米戦争を考えると、私たちは信じられないほどの奇跡に近いものを感じました。言うまでもなく、戦争の傷あとには到るところに見うけられました。食料品や日常必需品は欠乏し、バラックの掘立小屋は質素な住居へ変わり、すりきれた衣服、娯楽の施設はほとんどなく、そのための時間もありませんでした。基本的な必需品を得るために、日々戦っている人は、法外なエネルギーを費やすものです。にもかかわらず「日本の青年たちは新しい価値を求め、平和と正義のよりよい世界を一生懸命、築こうとしている。」

私たちアメリカの若きクリスチャンは、援助を求める日本の教会の呼びかけに応じて来日しました。同年代の青年たちと相並んで歩み、青山学院のようなキリスト教系の学校で教えることに同意したのでした。明らかに私は、一人のクリスチャンとして、他の人びとと人生を分かちあい、キリストの愛の精神で、前敵国の日本と和解する仕事に加わる呼びかけに応じたのでした。この決定は、私自身と神との戦いの後に下されたのでした。若い人たちの生活再建を助けるようにという教会の指導者たちの呼びかけに、私は深く感動しました。心の中での苦しい格闘の末、ついに私は人生の意義と目的をそこに見出したのです。こうして日本キリスト教の経験ある指導者たちの指導の下で、私は仕事をするようになりました。日本語

を話せないことから誤解が生じ、異文化の生活での無経験は、同僚との関係を暗くするだろう、と指導者たちは忠告しました。日本の良き指導者は、忍耐するように私たちを促し、使命をもって心から献身することを私たちに求めました。日本での最初の三年間は、畏敬と、興奮と、苦難と、謙遜と、心の広がりとの乱れ、また心の温まる時期でもありました。

これが日本に私が来るようになった、最初の決心についての簡単なスケッチです。新しい女性になることは、型を破り、自立に達し、信じられる人間になることです。確かにこれは、ときにはつまずきながらも頑張って歩み続ける人生の旅です。個人的にも社会的にも、障害を取り除くための山は、今でも存在しています。同じような旅をする熱心な人たちの共同体に加わることも必要です。私たちはいつも同じ心でいるわけではありませんし、いつも同じ仕事についているのでもありません。にもかかわらず、私たちは互いを受け入れ、互いの才能を確認しあい、成功したときには互いに喜び、失敗したときは互いに勇気づけあいます。とりわけ、私たちは人生に神の働きを認めます。そして私たちは社会におけるあらゆるレベルで、女性の成長の可能性や、充分な社会参加を侵害する社会的、経済的、政治的なさまざまな状況に、勇敢に立ち向かっています。私たちの人生が、他の人びとと解きほぐしがたいほど強く結びついているのを認めるとき、私たちは祝福されるでしょう。その人たちは、社会での深い傷をいやす道を探り、人びとの間の陰険な分裂を超え、豊かな多様性を祝福する人々なのです。

私たちの世界は、たいへん重要な問題に直面しています。いくつか挙げるだけでも——人口の急激な増加、環境開発、諸民族におけるさまざまな問題、エイズなどの生命をおびやかす重い病、女性に対する暴力、幼児の虐待などです。女性たちは、このような問題を男性だけに解決させてはいけません。そこで私はあなたたちに技術やこれまでに訓練されたことなどを、もう一度見直すことをおすすめします。それから自分にたずねてみてください。「私たちの地域社会、私たちの世界が前向きで健康的な関係に向かって変わってゆくために、これらの技術や訓練したものをもっと上手に用いるには、どうしたらいいのでしょうか？」

希望をもって生きてください。神様は私たちがキリストにおいて新しい人となるために、あわれみや、知恵や力で、私たちを満たして下さるということを確認して下さい。

“あなたに与えられている神の賜物を、再び燃えさせたせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。”（テモテへの手紙 二 1.6-7：新共同訳）

終りに、1911年、最愛の女性詩人、与謝野晶子の書いた詩に注目しましょう。

“山の動く日来る

すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる”

Ⅲ 青短のリベラルアーツとジェンダー

「女性と現代」科目群と青短のジェンダー教育

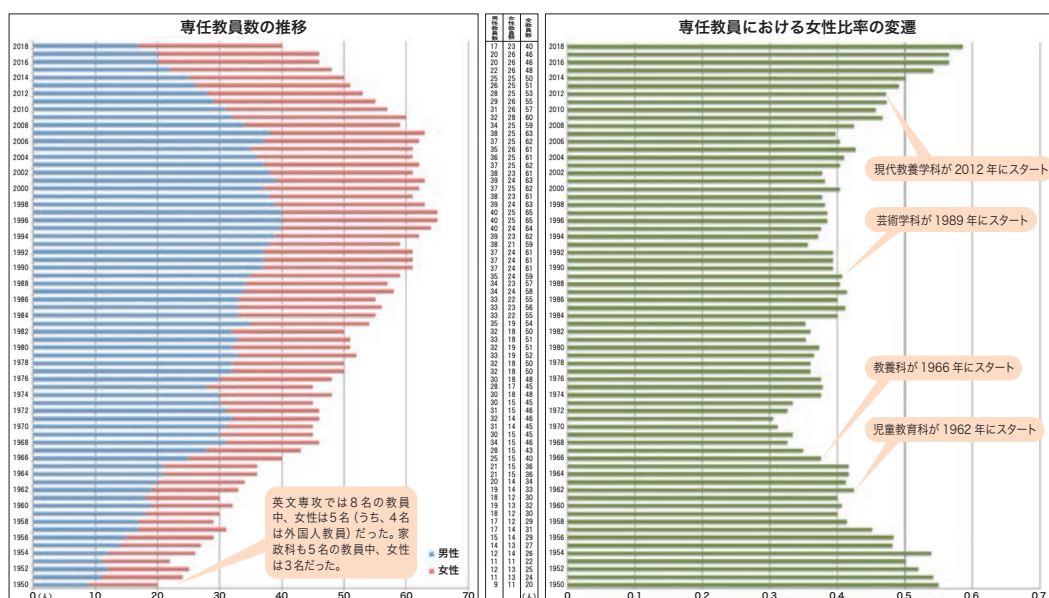
梅垣 千尋 (現代教養学科国際専攻 教授)

2012年4月から現代教養学科がスタートしたのにもない、現代教養コア科目を構成する三つの群の一つとして、「女性と現代」科目群が新たに設けられた。もっとも、「女性」の視点を重視した科目が、それ以前のカリキュラムに存在しなかったわけではない。1984年からは、英文学科に「女性学」という科目が新設され、1998年からは全学科の学生が受講できるよう、一般教育科目の主題科目に位置づけられた。さらに2007年4月からは、3名の専任教員を軸とするオムニバス授業の形態をとった総合科目のひとつとして、「女性と身体」という科目が始まっていた。

すでにこれらの科目を通じて、女性として現代を生きることをより深く考えるための学びの必要性が、専任教員のあいだで広く共有されていたことが、「女性と現代」科目群の設置につながったといつてよい。さらに俯瞰してみれば、その背景としては、次の2つのことが指摘できる。

第一に、1990年代ごろから日本のアカデミズムのなかで次第に存在感を増しつつあったフェミニズムやジェンダー研究の影響である。本学では開学以来、女性をその主な学びの担い手とする分野として、家政学や児童教育学といった領域が重要な位置を占めてきたが、これらの中心をなしたのは、女性という視点に立った学びというよりも、各分野の専門知識についての学びであった。しかし、2000年代に入って新たに本学に就任した専任教員のなかには、フェミニズムやジェンダーの観点から各自の専門領域を探究する研究者が複数おり、これらの教員が、2012年度の改組にむけたカリキュラム編成において一定の役割を果たすことになった。

第二に、さらにその下地となった要因として、2000年代後半から、本学の専任教員における女性の比率が高まっていたことがあげられる。グラフのように、1950年の開学時には、20



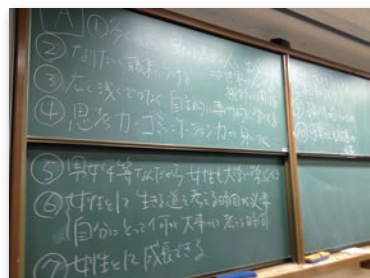
名の専任教員のうち女性は11名と、全体の過半数を占めていたが、1950年代後半以降には、男性教員の採用が増加した。そのため、1960年代後半から2000年代前半にかけては、専任教員に占める女性の割合は、3割から4割ほどで推移することになった。しかし、2000年代後半からは、女性の大学院進学率の高まりなどを受けて、女性の採用が相次ぎ、女性教員の割合が増加の一途を辿っていく。女性教員のなかには、ジェンダー研究を直接の専門としていない場合でも、本学への就任とともに、学生と同じ女性としての目線を重んじた内容の授業を展開していた者が少なくなく、そうした授業が「女性と現代」科目群のなかに集約されることになった。

新たに始まった現代教養コア科目は、従来の共通教育科目にみられた「人文科学」「社会科学」「自然科学」という専門領域ごとの区分に代わり、テーマごとに科目群を分ける点に大きな特徴があった。「女性と現代」科目群のなかには、表のように、さまざまな学問分野の科目が混在している。このようなカリキュラム構成がとられた理由は、縦割りになって細分化した学問分野に横串を通すようにして、「女性として生きること」の意味を総合的に学ぶことに力点が置かれたためであった。さらに、家政学科や芸術学科での学びを引き継いだ科目が並ぶのも、本学がカバーしてきた領域の多彩さを示すものといえよう。これら以外にも、実践的な聞き取り調査をする演習など、ゆたかな学びの場が展開され、この科目群での学習を基盤として、学びの集大成である卒業論文で、女性やジェンダーの視点に立ったテーマを選ぶ学生たちも多く現れるようになった。

「女性と現代」科目群のリスト

(2012年4月時点)

女性と現代A	女性と法律	女性と現代特論A
女性と現代B	生活管理学	女性と現代特論B
女性と文学	女性と労働	女性と現代特論C
女性と歴史	女性と身体	現代女性特別演習A
女性と芸術	女性と健康	現代女性特別演習B
女性とキリスト教	生活デザイン	



「現代教養コア入門」の授業風景

現代教養学科の1年生は、4月の入学後間もなく全員が3日間にわたり「現代教養コア入門」という講義を受けた。「女性と現代」では、女性が大学で学ぶ意味について、ディベートや映像を用いて考える授業が展開された。

IV 等身大の青短生たち－卒業生調査から見えてくるもの

世代ごとの青短生像 1

菅野 幸恵 (子ども学科 教授)

本学では、卒業生を対象とするアンケート調査をこれまで7回行っている。第IV部ではこれまでの卒業生調査をもとに、各年代別に等身大の青短生の姿を卒業後の進路を中心に架空の卒業生に語ってもらう形で描いてみたい。

青山 信子さん

1962 (昭和37) 年に卒業しました。静岡から上京してきました。本当は四年制大学に行きたかったんですけど、大正生まれの父親が「女の子が四年制大学行ってどうすんだ！嫁のもらい手がなくなる！」と言うので短大に入りました。東京の方が多かったですが、地方から来ている方も結構いらっしゃいました (*1)。

卒業後、地方からきたお友だちはみんな地元に戻りました。当時はほとんど自宅通勤が条件だったので、帰らざるを得ないということもありましたし、親元へ帰って花嫁修業という人もいたと思います。もうちょっと上の方々の時代は、私たちの頃よりも就職しない人が多かったみたいです (*2)。私はどうしても東京に残りたくて、就職しました。就職してから2年経って、また勉強しなくなって、英語の勉強を始めました。イギリスに行くチャンスもあったのですが、お見合いの話が進んでいて、結婚しました。当時は結婚しながら仕事を続けるなんて考えてもみないことだったので、仕事は辞めました。その後は主人が転勤族だったので、全国を転々としながら、子どもを育て、幼稚園や小学校のPTAの役員をしたりしました (*3)。

*1 1965年の卒業生調査では、東京出身が半数を占め、関東で7割。地域別に見ると中部とりわけ静岡が多かった。

*2 年代別の卒業時の進路をグラフで示す。1960年卒までの世代は「就職」は半分程度で、「家事手伝い・結婚」とした者も3割いた。(2008年調査)



1961 卒業アルバムより

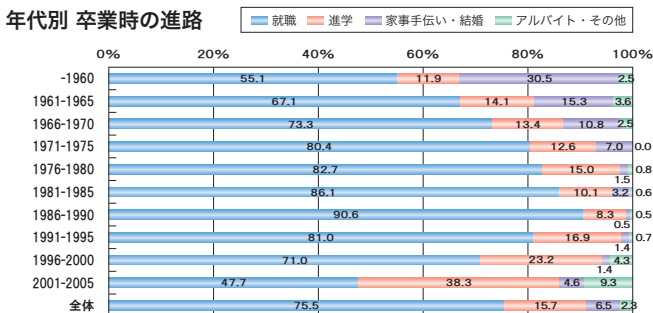


1962 卒業アルバムより



1964 卒業アルバムより・卒業式

年代別 卒業時の進路



1962年の主な就職先

() 内は人数
『青山学院女子短期大学六十五年史資料編』p540より

伊藤忠商事 (26)	日立製作所 (3)
三菱商事 (12)	大東京火災海上 (4)
住友商事 (6)	東京海上火災 (6)
木下産商 (3)	日本交通公社 (16)
博報堂 (3)	日本航空 (5)
住友銀行 (2)	日興証券 (5)
富士銀行 (2)	大和証券 (5)
本州製紙 (4)	第一生命保険 (3)
ニッカウキスキー (4)	安田生命 (5)
服部時計店 (9)	東京瓦斬 (3)
プリジストンタイヤ (3)	

業種別に見ると、「商事・貿易・生産」が57.2%と圧倒的に多い。

青山 洋子さん

1974(昭和49)年に卒業しました。私の時はオイルショック(1973年)の後だったんです。その前の年まで商社、損保、航空会社もいっぱい青短からとっていたので、みんな当然行けるもんだと思っていたんですけど、私が就職する年になってそれまで100人以上とっていた商社が一気に減って苦戦しました。私は商社に就職することができましたが、友だちは何社も落ちてました。「青短からなの?」「そんなことがあるんだ」って思いました。

就職して2年間くらい経つと、ずっとこの仕事するのかと疑問に思うようになりました。当時は男性と女性ではっきり職種が分かれていて、女性はあくまで手伝いでした。会議があると案内を出して出席の確認、資料は男性が作って私たちはコピーして綴じるという感じでしたから何のために毎日ここに通ってるのかなって、行き詰まってしまって、辞めるか結婚かと思ったときに、ちょうど結婚の話があって、結婚しました。

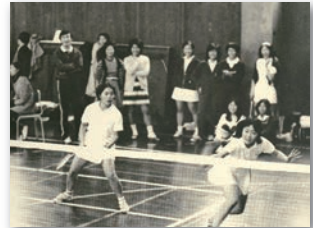
夫は公務員だったんですけど、短大卒で商社に勤めていた私の給与の方が多かったです。転勤もあったし、20年以上専業主婦をしていましたが、40代半ばになって再就職しました。はじめはパートタイムで働いていたのですが、もう少しやりがいのある仕事がしたいと思い、その後派遣会社に登録し、フルタイムの職につきました。



1972 卒業アルバムより

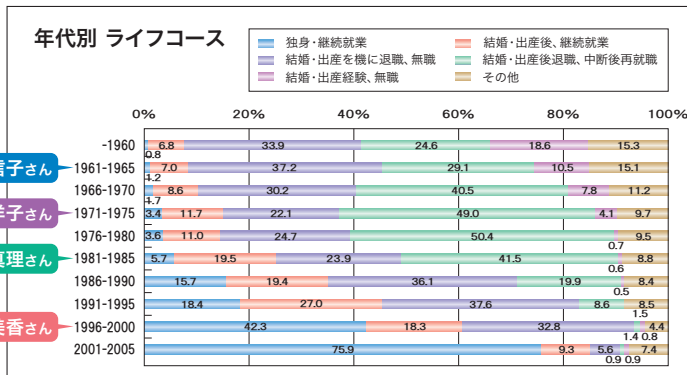


1973 卒業アルバムより・青山祭



1974 卒業アルバムより
東京都私立短期大学体育大会

*3 年代別のライフコースをグラフで示す(2008年調査)。信子さんの世代(1961-1965)のライフコースとしては結婚・出産を機に退職し、そのまま働かずにいる人の割合が大きい。



1974年の主な就職先

() 内は人数
『青山学院女子短期大学六十五年史資料編』p542より

富士通 (12)	伊藤忠商事 (30)
ブリジストンタイヤ (8)	丸紅 (26)
新日本製鐵 (6)	住友商事 (11)
日本鋼管 (5)	日本興業銀行 (8)
サントリー (5)	東京海上火災保険 (39)
日本楽器 (5)	安田火災海上保険 (15)
日本経済新聞社 (6)	大正海上火災保険 (11)
三井物産 (41)	日本航空 (18)
三菱商事 (38)	幼稚園教諭 (39)

不況のあおりを受けつつも、就職希望者の99%が内定を得たようだが、内定取り消しや自宅待機の通告を受けた者もいた。

IV 等身大の青短生たち－卒業生調査から見えてくるもの

世代ごとの青短生像 2

菅野 幸恵 (子ども学科 教授)

青山 真理さん

1985 (昭和 60) 年に卒業しました。県立高校出身で、四年制大学に行く人も多かったのですが、当時、就職は短大の方がいいと言われていたので、推薦で青短に入りました。当時の青短のネームバリューはものすごく、学科の数も多いため、人気がありました。入学する前は、派手な学校というイメージがあっ
て不安だったのですが、実際に入ってみたら全然派手じゃなくてみんな真面目でした。

当時は 10月1日が採用試験の解禁だったんですが、縁故などフライングで9月から始めている人もいました。私は 10月1日に始めて、2週間くらいで決まりました。みんな就職に苦労はしていませんでした。航空会社を受ける友だちなんかは、大手自動車会社の推薦があっても、断ったりするくらい結構タカビーな時代でした。就職には短大が有利と言われていました。

児童教育学科に友だちがいたのですが、幼稚園教諭の免許を取っても実際に就職するのは 100名中 10名いるかないかと聞きました (*4)。

就職するのだったら短大で、よほど優秀でないと四年制大学の女子は就職できない。学校の先生とか、弁護士になるとかそういう資格を活かした仕事は別ですけど、結婚したら辞めるというイメージがまだあったと思います。私が入った会社は短大卒と大卒で職種が全く違っていました。総合職とか一般職という言い方ではなかったと思いますが、大卒の人は同期でも同期ではないのです。何年か後に秘書部に配属されたのですが、秘書部は大卒の人は入れなかったです。

6年勤めて結婚退職しました。結婚したら辞めてくださいという感じでした。同じ部にいた後輩は結婚しても続けたいと上司に言ったら、辞めなさいと言われたそうです。子どもが生まれるまで、パートで働いて子どもができて辞めました。その後はずっと専業主婦で、下の子どもの中学受験が終わったら、仕事を再開しようかと考えています。

*実際この年に幼稚園に就職した者は 24名だった。真理さんの発言は当時勤めていた教員からも聞くことができ、当時の実感だったのだろう。



1983 卒業アルバムより



1984 卒業アルバムより



1985 卒業アルバムより

1985 年の主な就職先

() 内は人数
『1986 年度就職のしおり』より

日本電気 (14)	三菱商事 (25)
ソニー (17)	野村証券 (17)
富士通 (16)	日本銀行 (9)
キリンビール (10)	日本興業銀行 (12)
日本航空 (40)	第一勧業銀行 (18)
伊藤忠商事 (11)	富士銀行 (11)
住友商事 (9)	東京海上火災保険 (41)
三井物事 (41)	

分野別に見ると金融・保険 34.9%が最も多く、次いで製造業 26.3%

青山 美香さん

1996(平成8)年卒です。もともと四年制大学志望でしたが、叶わず、滑り止めで受けていた青短に入学しました。はじめは編入学を目指していたのですが、授業を受けたり、友だちと過ごすなかで、短大良いかもと思うようになり、就職することになりました。同級生のなかには編入学した人も結構いました(*5)。

私のときは超水河期でした。本当はマスコミに行きたかったのですが、そもそも短大生の募集がありませんでした。福利厚生などの条件を見たかったのですが、そんなことは言っていられなくて、手当たり次第に受けていく感じでした。それでも他の短大に比べれば青短は学校のネームバリューがあったのか、書類で落ちることはありませんでした。最終的には銀行に内定を頂くことができましたが、同級生のなかには、思うように決まらない子もたくさんいました。

就職5年目に一般職から準総合職に職種転換試験を受けて、融資の担当をしていました。9年勤めて結婚を機に退職しました。本当は退職まで勤めたかったのですが、自分の体調と夫の仕事との兼ね合いで辞めました。

私が入った翌年くらいまでは支店に新しく入ってくる女性はみな短大卒だったんですが、翌々年くらいからみな四大卒になりました。子どもの手が離れたら、再就職しようと思って、求人誌を見ているのですが、応募資格を「大卒以上」している企業が増えているような気がします。もし本気で再就職するとなったら、正規で働くのは無理なのかなと思っています。

*5 進学者の割合は、1994年卒あたりから2割近くを占めるようになってきた。進学先は本学専攻科、青山学院大学など。

出典：

菅野幸恵(2010)「卒業生調査報告」一質問紙調査とグループインタビューから『青山学院女子短期大学 総合文化研究所年報 第17号』pp.67-82
青山学院女子短期大学65年史編纂委員会(2018)『青山学院女子短期大学六十五年史-資料編』



1994 卒業アルバムより・グリーンパーティー



1995 卒業アルバムより



1996 卒業アルバムより・春期プレイデー

1996年の主な就職先

()内は人数
『1997年度就職のしおり』より

ソニー(17)	東京三菱銀行(17)
松下電工(10)	富士銀行(40)
日本電気(10)	全日本空輸(9)
大塚商会(20)	空港旅客サービス(11)
伊勢丹(15)	幼稚園教諭(20)
日本銀行(14)	保母(5)
三和銀行(17)	

分野別に見ると金融・保険 28.9%が最も多く、次いで出版・製造業 20.9%



注目ポイント

「ハンドバッグをもらったら、お嫁に行かなきゃいけない？」

青短生の恋愛事情

2008 年に行った卒業生へのインタビュー調査では、かつての青短生の恋愛事情を垣間見ることができました。

1960 年代卒のある方は、青短時代におつきあいしていた方と結婚されたのですが、周りの人には恋愛結婚なんかしたら泣くわよと言われたそうです。見合い結婚が一般的だった当時は、家柄も何もわからない人と結婚することは“危険”なことだったそうです。

当時の青短生にはどのような出会いの場があったのでしょうか。ダンスパーティーで他大学の学生と知り合うことが多かったそうです。当時は社交ダンスが流行っていて、キャンパスの近くにはダンスの練習場もあったそうです。



ダンスパーティー 1969 年 5 月 20 日
(卒業アルバムより)

別の 1960 年代卒の方はボーイフレンドからクリスマスプレゼントでハンドバッグをもらったことを母親に言ったところ、「そんなものをもらったらお嫁に行かなきゃいけないから返しに行きなさい」と烈火のごとく怒られたそうです。今は恋愛結婚が一般的ですが、1960 年頃までは見合い結婚の割合の方が多く、この卒業生たちの母親世代は当然お見合いでした。見合い結婚と恋愛結婚の割合が拮抗していたのがちょうど 1960 年代です。お見合いが普通だった母からすると、娘の恋愛は危なっかしく思えたのでしょうか。

出典：菅野幸恵（2010）「卒業生調査報告」－質問紙調査とグループインタビューから－
『青山学院女子短期大学 総合文化研究所年報 第 17 号』pp.67-82